

---

**問い合わせ「探しものは何ですか」 答え「転生前の友人です」**

さんすべりあ

---

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

問い合わせ「探しものは何ですか」 答え「転生前の友人です」

### 【NZコード】

N4045Y

### 【作者名】

さんすべりあ

### 【あらすじ】

防御区の外では妖獣が暴れる世界 あるいは時代。主人公は最年少で妖獣を狩るライセンスを得たハンターである。昼は学校、夜は狩り。そんな彼は自分の名が広まることで、友人が会いに来てくれるのを待っていた。

-----初投稿なので、温かい目で見ていただけるとありがたいです。いろいろ王道のはず。たぶん。違うかな。

## プロローグ

ひとつ影が木の下に振れていた。

ゆらり、ゆらり。

木の幹にいた小さな白いものは、たつた今それに気づいたようにふつと頭を上げた。黒目しかないつぶらな瞳が、振り子時計のように揺れる影を追う。ゆらり、ゆら。

首を傾げた小さなものは、冷たい朝の空気にぶるりと身を震わせると、苦労して右前肢を伸ばした。次に左後ろ肢。ぴんつと四肢をつっぱると、一気に木を駆け登つた。幹から手前の枝に飛び移り、影へとつながる一番近い位置へと走つた。

そして繩は無視して、枝から直接影へとダイブした。

その時、朝日が影を照らした。

長い、膝まである長い髪の若い娘の顔が白い靄の中に浮かんだ。

深く刻まれた苦悶の表情は、爽やかなはずの朝日さえ葬送の色に染め上げた。靄と早朝の光を死装束に変えてまどった娘は、首を吊つた際に吐いたのか口元を汚していたが、そうであつてさえ厳肅さは失われもしなかつた。

白いものはしつぽでバランスをとりながら娘の頭から肩へ飛び回っていたが、彼女の顔に小さな鼻を寄せてフンフンと嗅ぎ出した。そしてカリッと引っかくと、興味を失つたように離れて行つた。

健康のために毎朝走っているメタボリック気味の男性が、その木の植えある神社の境内にさしかかつて悲鳴を上げる頃には、その白いものはどこかに去ってしまった誰にも見つけられなかつた。

## 1 卒業式は欠席しました。

「まどかー。聞いたか？ 田島涼湖の呪い」  
たじまりようい

突然後ろから声をかけられて、まどかはつるをげに白鳥へと振りむいた。

どことなく険悪な視線を向けられた白鳥はそれでも粘り、手近な机の上にあぐらをかいて、悪意のない笑みを見せる。

「なんでお前がここにいんだよ」

「はつはつはー、驚いたろ。大成功。一日遅れの卒業証書をもらいに来た友人、一名様、あんなーい。それよりさ、聞いた？」

懲りない男だった。

不機嫌になつて、まどかは見納めとなる中学校の教室に視線を逸らせた。

不登校その他で卒業式に出席しなかつた生徒は何人もいるが、さらに不都合な理由で出席できなかつた生徒もいる。まどかと涼湖と、その涼湖の呪いで殺されたと噂されている女子二人だ。

まどかはハンターの仕事で、涼湖と女子たちは自殺で。いずれにしても、一般生徒の保護者は眉をひそめたはずだ。

「あれ？ まどかって田島と知り合いだつた？」

逸らせた視線を追つた白鳥が、彼女の机をじつと見てゐるまどかに、氣づいてとぼけた声を上げた。

「……友達つていう意味じゃなければ、知つてゐる誰だつてそうだ。」

「それにしても、ヒトが三年間の思い出に漫つてゐる時くらい、氣をきかせて黙つて欲しいんだが。お前にそういう氣づかいを期待するのは、やっぱり無理なのか？」

「まどかが漫るつてナニ？ 本氣か、正氣か、ありえない！」 黙つていて欲しくて適当に言つたら、さらば騒がれてしまった。

もつ口イツには何も期待するまこと思いつつ、溜め息をつく。

だが、そんなどぼけた友人に、涼湖の机を見ていたのを氣づかるとは思わなかつた。安全な場所だと氣を抜いていたせいだ。隙だらけだつたかもしれない。

涼湖は全校生徒どころか、区内でも知らない者のいない有名人だった。

悪い意味で。

腰を越えた長い髪と切れ長の目をした彼女は、まるで平安時代の女のようだつた。彼女を見かけるたびに雛人形を思い出したくらいだ。

もつとも涼湖は、まどかが見てゐるなどとは思わなかつただろう。学校ではいつも数人の信者の熱心な瞳に囲まれて、さらば一般生徒のうさんくさげな視線にさらされていたから。

靈能力があるという噂だった。

無くした物を捜しめてたり、事故を予言したと聞いた。

だから一度、まじかは信者を押しのけて彼女の正面に立ちこなつてやつたことがある。

『オレは円城円。えんじょうまどかハンターとしての名は静義さやぎ』

勇猛で知られるハンターのライセンスを持つことはどうでもよかつたのだが、反応を見たくて名乗ってみた。しかし残念なことに、彼女はまどかの期待を裏切った。

『あたしは巫女。加護を望むの?』

涼やかに微笑んだ表情はそれしかったが、求めているものとは違つた。

彼女は静義の名も気にとめず、望むものも当てられなかつた。

『ハズレ』

彼女の信者に無礼だと一斉に非難されたが、氣にもならなかつた。席に戻る。内心へこんでいたのは、仲のいい三村の他に誰も氣づいていない。

『何しに行つたわけ。探し人だと思ったの?』

『……ちょっとだけな。そうでなくても、アイツを見つけてもうれしかった。でも、ダメっぽい』

あれなら山櫻桃の方やまざくらが上だ。そう思つて頬杖をつけば、勝手にため息が出てしまつた。

三村が肩をすくめてメガネのブリッジを押し上げた。

『声かけたんだから、ちゃんと説明して、形だけでも探しても『られないのに。あれだと、田島さんのとりまきの恨みを買うかもよ』もつ関わらない。一回話しかけただけで恨まれてたまるか』

『円城くん、君自分が目立つて分かつてないの？ 普通に話しかけるならともかく、女子的には今の、充分にイベントだつたよ。だから、恥をかかされたと思われるかも』

『知るか』

三村の懸念けねんは取り越し苦労で、信者がまどかに言いがかりをつけてくる事はなかつた。

靈能者と公言する涼湖のことは、それで苛められたりもしてるんだから言わなきゃいいのだと気になつたが、イベントとまで言わると一度も話しかけるのも躊躇ためらわれた。彼女は孤立していただつた一言の忠告でさえ目立つのだ。

いつもまとわりついている信者以外、生徒はみな涼湖から距離を置いていた。

当然といえば当然だ。

自分の常識と違つモノを拒否する大多数と、周りを知りうともしない涼湖。

どちらにも共感できなかつたから、まどかは放つておいた。

そして 涼湖は卒業を控えたある日、首を吊った。

その日から彼女の呪いといつ噂が流れ始め、今日に至る。

## 1 卒業式は欠席しました。（後書き）

初心者です。見やすさとか、こんな感じで大丈夫でしょうか。  
ひとついただけると喜びます。ぺこり。

## 2 あにつてててててててて

「昨日、安部が死んだんだってさ。いじめに加わってた女子グループの。前の人と似た感じで、錯乱して走り出して、ベランダから飛び下りたんだって」

放つておいて欲しいのに、おしゃべりな田島はまだ勝手に話していた。

「卒業式当日つてのも凄いよなあ。涼湖つてホンモノだつたんだつて、今さらびつくり」

「こちちは、お前がここにいることにびっくりだ。卒業を惜しんでくれる下級生ならともかく、男に待たれても嬉しくない。

「ひざい。わざわざ卒業後の学校までそんな話をしに来たんなら、よっぽどの閑人だな」

「何だよ、まどかだつて妖獸をざくざく殺してるくせに。人の死を興味本位で語るなとか言う? こんな時だけカッコつけんなって」「あれは『殺す』じゃなくて『倒す』。生物ですらないんだから」

三年の教室を出て昇降口に向かうまどかを、白鳥がバタバタと追いかけて来る。

「この友人に悪気はないのだが、空氣を読む力もナイ。

聞いた話だから本当かどうかは知らないが、涼湖が自殺した理由

は最低だつた。顔とノリがいい女子グループが、かなりひどい事をしていた。

それを知つてさえ平氣で噂話ができる白鳥の神経は、わざとまどかより太く、粗い。

「つて帰るなよ。円城センセ、待つてー。違うの、俺こういう話をするために来たわけじゃなくて、本当は三村たちとか皆で卒業パーティしようつて誘いに来たの！ きれいじいの女子もいるし、用意はできてるし、だから三村ん家いこうー。」

階段を駆け下りたついでに口けて最後の一三三段を滑り落ちた友人に手を貸して、まどかは眉をしかめた。

「だつたら最初からそりゃ言えつて。誘いに来る人選まちがつてる。迎えが白鳥だつたら話がずれまぐるつて、分かるはずなのに」

「ひでえ。まじかまでそりゃ言つて、せつかく同じクラスになつたよしみで友情を深めようとしてる、この俺の優しさを理解しろ」

「高校か？ お前と同じクラス？」

一人で連れだつて中学校を出ると、体育の教師が手を振つた。会釈程度に頭を下げるまどかと、両手を大きく振り返して「また遊びに来るつす」とはしゃぐ白鳥。

まったく性格の違うコレと一年付き合わされるのかと思つと、今から疲れる気がした。

白鳥は一応イイ奴だが、隣にいて欲しいとは思わない。できるなら無関係な、遠い遠い場所で幸せになつてもらいたい。

そんなまどかの気持ちも知らず、彼は元気よく初春の街を歩く。

「ガッコから通知来たる。二組つて、三村に聞いたぞ？ 男は、俺とまどかと三村と山本が一緒。よろしくな」

「山本もかよ」

若干声が低くなつたのを察して、白鳥が慌てる。

「さすがにあいつは呼んでないから。大丈夫だから楽しもつ！ な？ な？」

「分かつたからそこまで氣をつかうなつて。オレどんだけ危険人物だ」

「いやいや、事実キケンなハンター様でしょ」

「人間相手には無害だつつの」

どこまでも墓穴を掘らざには済まない友人を、もうつたばかりの卒業証書（缶入り）でポコンと叩く。

大げさに騒ぐ白鳥の相手をしていると、神社にさしかかった。

涼湖が自殺した場所だ。

思わず足が止まつていた。

今はもう何もかも片づけられていて、境内は芽ぶきを待つ風情し

かない。死の匂いもなければ、どの木に首を吊ったのかも分からない。

当然だ。

普通とは違うが、まどかは靈能者というわけではない。

それでも、どうしても気になった。

今ここに探し人について欲しいと思った。

「……まどかつて、田島が好きだったとか？」

「ハズレ」

もう一度卒業証書で白鳥の頭を叩くと、まどかは先に立つて三村の家へと歩き始めた。

### 3 はんたー + はんたー

数日後の夜。

かすかに物音がした。まどかは曇つて星の隠れた空から視線を戻した。

防御区の中ならともかく、外で気を抜くことはない。近づいて来る足音。異質な気配。

三匹が同時に飛び出してきた。

集団で移動するのがこの妖獣の習性だつたから、予想の範囲内だ。さらに言えば、最悪の事態として十数匹を予想していたので、数が少なくてちょっとだけ安心した。

狙つて来たとはい、コレと戦つのは初めてだ。

まどかはすでに抜いていた剣で一匹に斬りつけた。

表面が硬くて一瞬刃が止まつたが、踏みしめる足に力を込めて体重をかけば、水晶みたいな音を立てて砕け散つた。あとは勢いのままに断つ。

断つというより叩き割るといった方が正しくて、刃こぼれした感触が手に伝わつて来た。

「あーあ。せつかく砥<sup>と</sup>ぎに出したばっかりなのに」  
返した刀で、//ラの魔法と拮抗勝負をしていた妖獣を両断する。

「砥いだだけで斬れる方がおかしいって分かつてる？ てか、どう考えても物理攻撃すべき相手じゃないから。ふつうは高位魔法で退治するモノだから！ ああもう、怖かったーっ？

そこまでの大技を使えないミラは、額にびっしりと冷や汗をかいだまま文句を言つた。

「だよなあ。それを一撃で倒すお前ってどうよ」

廃墟の崩れた石柱の上にあぐらをかいだ鬼灯きとうが、呆れたように咳きばや

く。

彼も大刀を使うが、その妖獸を倒すのは明らかに面倒とわかつていたので、座つて樂をしていた。

が、もう一匹の妖獸が、彼の妹のいる別の石柱の上に向かつて行くのを見て、立ち上がる。大刀をふりかぶつて柱から飛び降りると、重力を利用して妖獸の背中に一撃を打えた。亀の甲羅こいのこのような外装を、加速と重さで押し潰す。

「ありがとつ

少女の濡れたように黒い瞳が、笑みの形に細まる。かぼそい声で山櫻桃やまざくらは言い、詠唱をやめた。途端じたんに、まだか達を包んでいた能力増強の力場が消える。

「まあねえ、狩りに引っ張り回してるのは俺だし。ここで山櫻桃に

ケガさせちゃつたら、お兄ちゃん失格

「このシステム。ちょっとは静義を見習つたらどうなの。女を地面で戦わせて自分は安全地帯つて、ありえなくない？」

げし、ミラが鬼灯の背中に蹴りを入れたので、鬼灯は石の断面に似た妖獸の死骸に顔からつっこんだ。容赦ない。

「ひどいなあ。だつて俺、こんなのに直接向かつたつて役に立たねえもんよ。しかたないだろ。これも作戦」

たつた今その妖獸を倒したのだから、役に立たないはずはない。割れた外装に余裕でもたれかかつてヘラヘラ笑う様子は、ミラでなくともツッコミを入れたくなる。

「偉そうに言つな つ！」

案の定、ミラはきつくカールさせた金茶の髪を振り乱し、げしげしと彼を蹴りはじめた。

「ぼうりょくはんたーい

「ふざけんな つ！」

「……よく飽きないな」

魔法が専門の女性なので蹴つても痛くはないし、鬼灯も分かつてやられているので、まどかは口を出したりはしない。この二人はいつもこんなふうで、冗談で本気を隠したり、無言の了承のうちに実力全開のケンカをしたりしている。

ハンターが全力つてどうだよ、と思つたりするけど  
心配するだけムダだ。

それでも山桜桃だけは石柱の上でおろおろしていた。

他人の感情より先に『力』が見える彼女には、そのケンカが『力』の暴発と感じられているのかもしれない。薄い肩をさらに小さく縮めて、両手を組み合わせている。

人とは交わらない異質な美をもつ彼女のそんな姿は可憐だと思わなくもないが、小さな村なら一匹で破壊する妖獣を目の前にしても平気で詠唱できるのに、兄と仲間のふざけたケンカに涙目なのは、こつけもこつけで何か間違ってる。

「 北部一〇七番隊、さやま 静義じやうぎ、じゅく 絡居じくい の森で甲犀こうせき を三四退治たいぢ した」

いずれにしても心配するまでもない三人の日常は放つておいて、まどかは国家保全局の支部へ連絡を入れた。

『』で名乗り、仲間が呼ぶ『静義』という名は、彼が狩りに出る時の登録名だ。

『ハリ』や『鬼灯きとう』も同じく登録名称だ。

一人では危険な狩りを成功させるためにハンター同士組んだだけのチームだから、まどかは彼ら三人の本名を知らない。

一年前、それなりに成長して戦えるようになった時、まだ中学生の自分を受け入れてくれるハンターはいなかった。

ただでさえ死と隣り合わせの上、ほとんどのハンターは狩りを職業として行っている。

仕事に、足手まといになりそうな子供を連れて行く大人はないだろう。唯一受け入れてくれたのが、鬼灯たちだった。

鬼灯は、子供を一人で狩りには行かせることはできないと職員に登録を拒否されていた自分の肩をつづいた。うちに来なよ、と。

予想より全然イケメン！ とはしゃいだのはミラで、山桜桃は鬼灯の後ろに隠れながら自分をひつそりと見つめていた。

その物静かで臆病おくびょうな少女が自分を誘えと一人に言ったのだと、後から聞いた。

強い『力』を持つまどかがいれば、兄やミラが狩りで傷つくことはないと思うたらしい。魔力の鑑定をする人間はいるが、生命力こみでの『力』を感じられるなんて聞いたことがなかったので、初めは単純に驚いた。

そして今は、こつそりひつそり頼りにしてもいる。自分を見つけたように、もう一人見つけないだろうか、と。

『甲犀を、三匹い？ 相変わらず凄いな。甲羅はお前らで持つてこられるか？』

雑魚ざいじゆならいざしらず、大物妖獣である甲犀の輝く外装は貴重だ。

宝石としても価値があるし、その硬さを活かした素材となることもある。

「重いから回収に来て欲しい」  
けつこう大きかったので念のため携帯カメラを甲唇に向けると、まだそこにもたれていた鬼灯が√サインを出した。ケンカを一時中断して、ミラも可愛らしくポーズを決めたりする。

『……りょーかい。成獣なわけな。料金は報奨金と外側売った代金から引くって事で、軽トラまわすから』

「よろしく

その会話から時間がかかりそつだとふんだのか、山桜桃が短い詠唱で妖獣避けの祓いを行つた。

兄が彼女に手を差し伸べると、その手につかまり、よろけながら柱から降りて来る。

そして背負つていた羽根モチーフの飾りのついた鞄から、レース模様のペーパーでラッピングした手作り菓子を取り出した。

#### 4 戦場でお茶会を

出てきたのは、山櫻桃手作りの菓子である。  
今日はドライフルーツが入ったパウンドケーキと「アクラッキー」  
だった。

ドリンクボトルから紅茶まで注いで用意するので、場は緊迫した  
戦場から一転して、お茶会になる。

「仕事の後の一一杯はうまい。ねえねえ、コレビギヤッて作るの?  
なんか本格的な味」

「そこで『ふはー』とか言つたら、オヤジ決定。俺、潤いのないチ  
ームなんて嫌だなあ。ついでに口ツ訊いたつて、作んないのに」

「つるせこ・うるせこ・つるせこ。鬼灯は黙つてお菓子食べて!  
あたしは山櫻桃にきこてるの!」

ミリは手近にあつた物を投げつけようとして、それが甲犀の欠片  
だと気がついて手を止めた。きれいーとか言つて、嬉しそうにジテニ  
ムのミニスカートのポケットにしまつている。

「……そういうコはなんだよねえ」  
壊めているのか貶しているのか微妙な口調に、またミリがムツヒ  
顔を上げる。

さわらぬ神に祟りなし、である。まどかはクッキーをつまんだ。  
甘い。だが、戦闘でとがつた神経を休めてくれる。

「うまいな、コレ」

「良かつた」

また一人のケンカにオロオロしていた山桜桃が、小さな笑顔を見せた。

「……」

明らかに年下の一人の方が落ち着いていて、そしてこのままだと確實にまどかが菓子をすべて食べつくすと思われて、ミラと鬼灯は口論をやめた。急いでクッキーに手を伸ばす。

「成長期は分かるけど、一人で食うなって。そういうばあ前、明日から高校なんだろ。こんな夜中までうろついていいのかあ？」  
「別に。どうせ入学式と簡単なオリエンテーションだけだし、寝てもあんまり関係ない」

「いやソレ間違ってるから。オリエンテーション聞いたとかないと、正しく単位とれないから。困るから」

「それは大学だろ。鬼灯の実体験？」

「なになに、鬼灯つたら留年の危機なの？ もしかして来年度はあたしと同級生？ ウケるー」

けられると甲高い声で笑つたミラは、大物をしとめてハイテンションになつてゐるのかもしけなかつた。バンバンと鬼灯の背中を叩いて笑い続ける。

「あの、ミラ。お兄ちゃんをいじめるの、やめて」  
山桜桃が、半泣きでよつやく言つた。

ミラは今度は少女の首に腕を回して引き寄せ、ストレートの黒髪

をぐしゃぐしゃと撫でまわした。笑顔の相手に抵抗もできず、山桜桃は硬直している。

「いじめてないいじめてない。大丈夫よ、鬼灯、頑丈だから。それよりお兄ちゃんが留年つて嫌じやない？」

「まだ落ちてないからー。泣き落して履修届りじゅうとづけを受け取つてもうつたし、明日の再々試で受かれれば三年になれるし。だいたいお前、保全局から声掛かつてたんだろ。無試験でキャリア待遇つて。ソレ蹴つてうちみたいな二流大学に来るなよお」

ミラの瞳がすっと細くなつた。

彼女は唇を尖らせ、これみよがしに山櫻桃やまざくらとうに抱きつく。

「キャリアなんて、保全局もあんたもバカみたい。分かんないの？  
彼女が不機嫌なのはわかる。

「必要なのはあたしじゃなくて、北部一〇七番隊の人間。うちらのチーム、短期間に凶悪妖獸をざくざく倒しちゃつたから、目立つちやつたのよね」

小さな少女はなんとか脱出しようと、ぱたぱたと手足を動かしたが、そのくらいでミラが放すわけがない。ますますぎゅっと抱きしめている。

美女と美少女なので絵柄としては文句なしだが、ミラの瞳にあるのは、その評価がつまらないと思つてゐる冷静な色。

仲間をからかうフリでもしていなければ、やつてはいられないのだ  
う。

「今日の狩りもさうだけど、ハイレベル危険バシバシな場所に行きたがつて妖獣倒すのは静義じゃない？ あたしなんて、入局したつて即戦力にならないつてすぐに切り捨てられるわ。それくらいなら、大学行つて自力で就職でもなんでもした方がマシ」

彼女のプライドが傷ついているのにやつと氣づいて、鬼灯は慌てる。

彼はハンターとしての実力もあり、作戦を立てる時は思考も回るのに、こうじうところは少し鈍い。

でもたぶん、その鋭さと鈍さのアンバランスをリラックスに入っているのと思う。

実は自分もだ。まじかは小さく笑った。

「お前なあ、自分が原因なのにそこで笑いますか

「ミラは分かつてる。オレがどういう言わなくたって、折り合いかんてちやんとつけてる。謝つたらきっと殴られる」

それとも（比較的無害な）戦闘中に、蹴られるか踏まれる。

「良く分かつてるじゃない。でー？ 静義つて、どこのガツコ行く

の  
「南東北」

パウンドケーキを一口で食べながら答えるが、ドライフルーツが歯にくつついてしまった。しかもとれない。ちょっと不幸。

「西ナシ高かあ、ウチらの大学から近いね」

「それで選んだわけじゃないけど、募集人数多いから楽に入れるし」

「どうせくつついたんだから一個も一個も同じだと、両手に菓子をキープしてみる。」

「食べるたびに歯にくつつくモノが増えたが、後で気にすることにしよう。」

「だったら、道ですれ違つたりするのか。もし声掛けの時、静義でいいか？」

「思いついて、鬼灯が顎に手を当てて尋ねた。

「ハンターであることをオープンにしているならそれでもいいが、隠している人間もいる。」

「ハンターとしての自分と、防御区域内部での自分を分けて暮らしたい者もいるからだ。」

「防御区域内で暮す人間の中には、凶悪な妖獣を倒すハンターを粗野で怖いだけの存在として考えている者もいる。」

「それが恋人だったり上司だったりしたら、狩りの仕事をしたくても遠慮する人間が出るかもしれない。」

「できるだけ多くの人間に妖獣を退治してほしい国家保全局は、そのへんまで考慮してみたわけだ。」

「お役所仕事のくせに細かい。」

「もつともその配慮は、人間の生活空間を荒し甚大な被害を出す妖

獸に、本氣で困つてゐるといつて証しでもあつた。

「それとも、あたし達にも内緒？」

「や、そんなこと無いけど。オレ、本名は円城円。えんじょうおん 内部で会つ時は、まどかで頼むわ」

「お兄ちゃんたちはそのまま呼んで大丈夫。もちろんわたしもね」

本当の名前・真名まなを使ったほうが魔法関係には+0・1くらいの修正がつく。生活空間での人間関係に問題がなければ、山桜桃とミラは登録名を実名にしたほうが効率がいい。

「静義、つりん、まどか君……ハンターなのを、隠してるの？」

ミラの腕から脱出するのは諦めて、次々と菓子を食べる様子を見ていた山桜桃が首をかしげた。

## 5 探し物はなんですか

「いや。隠してんのとは違うんだけど、人探しの一環で

「ああ。なんか言つてたねえ」

ポンと手を打つた鬼灯を、ミラがどついた。猫に似た吊り目が光る。

「『なんか』じゃないでしょ。中学生がカラダ張つて人探ししてるのは、忘れんなドアホ」

……ミラは大阪人なのだろうか？

かなり激しいツツ「ミ」に苦笑いし、まどかは山櫻桃から視線を逸らせた。

探し人の話が出た時の少女の寂しげな雰囲気は、自分が原因だと分かっていてもどうしようもない。

まだ、話したくない。

彼らを信じていろつもりだが、全部を打ち明けたら正氣を疑われそうで嫌だ。

そういうこと自体信じられないけど、山櫻桃は悲しんでいるのだろうけれど。

「覚えてんじやない。だったら、どうかせるみうな発言しないでよ」「だつて詳しく聞いてないからなあ。確か、名前がマスクミに取り上げられるくらいになつたら、会いに来てくれるかもつて言つてたけど」「覚えてんじやない。だつたら、どうかせるみうな発言しないでよ」

「いや、今の//トロビヤなかつたらビツかな」って

またもやケンカが始まリそうだつたので、まどかはナイナイと手を振つてみた。無関係な時なら放つておくが、自分が話題の時にやられると話が終わらなくて困る。

「田端的に呼ばれて、本当の名前つて誤解されたら無意味だから。『まどか』が『静義』を名乗る理由つてトロビヤに気づいて欲しいわけ」「結局説明になつてないわよ。なあに、生死もわからない生き別れの家族でもいるのー？」

明らかに信じていらない口調で言われた。

まどかは首を横に振つた。

ベタすげー。何時代の感動ドキュメンタリーだ。

「家族じゃないけど、生死は不明かなあ。万が一生きてたとしたつて、ここにいるかどうかなんてゼーんぜん分かんないし」

「……それ、売名行為の意味あるのかなあ」

鬼灯に考え込まれて、まどかはまた首を振つた。

「いいんだ。やれる事をやつておきたいだけだから  
たぶん自分でも、本当に余えるとは信じてない。ただの自己満足だ。

「もし会いに来てくれたら、びつするの？」  
まどか  
惑う声で山桜桃に訊かれた。

「どうもしない。ただ、いるなら会いたいだけ」

まどかがあっけらかんと答えると、山桜桃が細い眉を寄せ、ミラが深いため息をついた。

そして鬼灯は女性一人の様子にきょとんとして、良く分からぬからまあいいかあ、と菓子をつまもうとした。が、クッキーもパウンドケーキも、もはや食べカスしか残っていない。

「静義……」

「食べたかったら、キープしとけって。誰も食べなかつたら、いらないと思うだろ？」

「その前にお前が全部食つてるんだ！ 返せ、山桜桃の手作りをかえせえええつ！」

妖獸しかいないはずの廃墟にむなしい遠い吠えが響き渡り、甲羅の回収に来た業者をびくつとさせた。

\*

その夜、また一人少女が死んだ。

同じ中学、同じ人物をいじめていたという共通点を持つ被害者として、三人目。

その窓辺から、白い小動物が走り去つて行つた。

## 6 高校の入学式には出れました

入学式はあいにくの雨だった。

「寒つ」

「そりや、そんな格好してれば寒いだろうよ」

白鳥は、「デザインはいいが薄いコートを着て来た。まどかが腕を上げることで友人を引きはがすと、彼は今度は反対隣りにいた三村にくつついて熱をもらおうとする。

「だつていい女がいるかもしだねーし。第一印象つて大切だろ」「だつたら服より行動に気を配れよ。ガキみたいにはしゃいでる時点で、マイナス評価されんじやないのか」

言いながら、三人で始業式の行われる体育館へ向かう。

南東北高校は防御区域では最も学生数の多い高校なので、小学校や中学校で一緒だった学生が確実にいる。

「まじかに言わると、三村に言われる三倍くらい腹立つぞ。凄腕ハンター様でその外見、努力しないでモテる男に俺の気持ちはわからん。俺はしゃべりと優しさを強調していくのだ。実に正しいアプローチ。さすが俺」

「白鳥くん、今までに君が僕を三倍けなしてるつて理解してる?」

体育館にはすでにたくさんの学生が集まつており、騒いでいる二人には迷惑そうな、あるいは面白がった視線が注がれる。ついでに、

話す内容が聞こえた生徒達は驚きの表情を浮かべている。

「ハンター？ 高校生で？」

「知ってる。一中の生徒で最年少のがいるんだって」

「すげえな」

「やだ、怖いって。あたし小学校一緒だつたけど、今はもう近寄れないよお」

ざわめきは、大多数という仮面の下に隠れて発言者の特定はできない。

まどかも誰が言ったかはどりでもいい。無責任な憧憬とうけいも逃避さけいも、求めているものとは違う。

探し人が自分の名に気がついてくれればいいとは思つので、そうして噂が広まつていいくこと自体は満足だ。

事前に通知されていたクラスを探して歩いていると、そういうえば、と白鳥が周囲を見回した。

「山本見てねーけど、ショッパンから遅刻？」

「そぼりじゃねーの？ あいつ、学校なんてどうでもいい派だろ」「三人と共に同じ中学出身で同じクラスになつていた男子の名をあげた白鳥は、もう一度左右を見回してから、探すのを断念した。もしいたにしても、人が多すぎて見つけるのは困難だ。

まどかは最初から探す気などない。

山本はまどかがハンターをしているのが気に食わないらしく、機げんき

嫌が悪そうな時に会うとイヤミを言われた。

さすがにケンカを売つて来ることはなかつたが、そんな相手の出欠を気にかけてやる義理はない。

「一日日にさぼりだと、女子の印象が悪くなるのに」「白鳥くん、君の頭の中にはそれしかないのかい」「ない」

断言されて、三村はため息でメガネを拭いた。

聞こえていた女子がくすくすと笑つてゐる。気づいた白鳥がぱつと笑顔を向けた。

「どうもー。ね、こいつて二組？ 三組？」

「二組」

ノリの良さに苦笑した女子の一人が律儀に答え、彼女の前後に並んでいた何人かが互いに笑いあつ。女の子同士の、無意味で防御的な、『ミコニケーションツールとしての笑い。

「やつと着いたー。入口からここまで長かつたー。あ、俺たちも二組」

よろしくー、と自己紹介を始めた白鳥を置いて、まどかと三村は男子の列に移動しようとした。

が、友人の手がコートをつかんでいて放さない。

「「……」

巻き込まれて一方的な紹介をうける一人を、女子の一団がまたくすくすと見ている。

何人かの視線が好意的に動き、まどかと三村は互いに肩をすくめ

あつた。

女子にモテたいなら、自分たちは明らかに邪魔だと思つのに、白鳥はこうしてグループ作り（最終目標はもちろんオツキアイだ）を田指して自滅する。

「あたしは加賀森かがもりほのか、向中むかこちゅうだよ。こつちは江上冬えがみふゆね。隣みどりなみが区立中の湊奈波みなとななみで、その隣みどりなみが」

加賀森といつ、はじめに白鳥に答えた少女が周囲の女子を次々と紹介してゆく。

女子の方が男より集団を作るのが早いのは自明だが、入学式が始まるまでのわずかな時間にこれだけの名前を覚えるのは才能だ。

しかしあじかは、感心するより顔をしかめた。

「冬ひつて、春夏秋冬の？ オレ、ハンターの登録名は静義ねぎやきつてんだけど」

茶色こげいろっぽい髪の小さな少女は、困つたように視線を落として加賀森に身を寄せた。

「なあに、田城くんつて冬みたいのが好みなの？ そりじゃなかつたら、迂闊うかつに声をかけるのはやめてよね。世の中は草食系主流なんだから」

だからハンターお役所が登録名こまで気を配るのだ。

ハンターといつのは白鳥しらとりがしゃべつたので、乱暴なのが苦手な女

子は、すでにまどかと精神的に距離を置いている。逆に気にしない女子は興味を持つて観察してくる。

冬という女子は前者、そして加賀森は後者だ。

「珍しいね、円城くんが初対面で気にするなんて」

「一目ぼれか？ まさかそうなのか？」

三村が冷静に指摘し、白鳥が調子に乗つて騒ぎかけた。

楽しそうな女子と、友人をかばう加賀森のにらみに負けじ、まどかは両手を上げて降参した。女子に騒がれそうな時にはこいつするのが一番だと、鬼灯とリリのやりとりで学習している。

「そうじゃないって。はいはい、スマスマ。誤解させたオレが悪い」やいました

完全に加賀森の後ろに隠れた少女にペニンと頭を下げるが、本人の代わりに加賀森が笑つた。

「誤解はしたのは、その若干一名だけ」

「って俺？ ほのかちゃん、それキツイっす」

白鳥が大げさにシヨックを受けたポーズをとり、笑いをとることに成功している。

「面倒くさい」とにならなくて良かつたと思つてはいるが、三村が訳す知り顔でそつと囁いた。

「理由、言わないんだ？」

「……名前がカンペキに同じだった」

ぼそっと囁き返して、視界の端に映る少女を意識する。

外見的には田立つところのない、普通の高校生だ。  
背は低いが、ロリキャラ設定には程遠い（念のため言つておくと、  
田乳でもない）。

リーダーシップのある加賀森のかげに埋没<sup>まいぼつ</sup>している。性格は今見  
たとおり臆病<sup>おくびよ</sup>かもしぬないが、それだつてまどかが声をかけた時か  
らで、その前までは他の女子と共にきやあきやあ盛り上がつていた。  
どいまでも普通。

「探し人？」

まどかが誰かを探していると知つてゐる三村がまた踏みこんでき  
たが、即座<sup>まくざ</sup>に首を振つておく。

「また玉砕<sup>ぎょくへり</sup>」

冬も涼湖<sup>じょうこ</sup>と同じだった。『静義』といつ名を聞いても反応しなか  
つた。

互いに名前しか手がかりがないのに、この調子だと一生見つから  
ないような気がしてくる。だいたい、自分はいいとして向こうの名  
前なんて普通にありそつて困る（実際、ここにも一人いたしな）。

それ以前に、生きてない確率だつて高いし。

また会おうなんて約束なんてするわけもないが、しておけば気持  
ちの持ちようも少しは違かつたのかと思う。いまさらだが。

「田島さんの時とは反応が違うね。探し人じゃないのに気になるん  
だ。田城くん、それってやっぱり一日惚れなんじやないの？」

こちらの話は、白鳥の大げさなパフォーマンスで女子には聞こえていない。ほつとして、まどかは友人に冷たい視線を向けた。

「白鳥菌に感染したなら、こっちに来んなよ」

「根拠は君の視線。僕の意見と、彼の思い込みを同列に扱わないで欲しいな」

突き刺さる白眼視をものともせず、三村はメガネのブリッジを指で押し上げた。

## 7 ひまなので、状況説明をしてみる

\*

近年、ある時を境に全国各地で奇妙な獣が跋扈<sup>ばつご</sup>し始めた。

否<sup>いな</sup>、仮に獣と分類されているが、ソレはそもそも生物なのかどうかさえ分からぬ。

少なくとも動植物<sup>どうしょくぶつ</sup>という概念<sup>がいねん</sup>の上にはなく、系統図など作るのは不可能なモノ達だ。暫定<sup>とりあえず</sup>的に、今までいなかつたモノを総称して妖獣<sup>ようじゆ</sup>と呼んでいるだけだ。

生命体の進化は、生存のために起こる。

大地<sup>かわ</sup>が渴<sup>かわ</sup>いたら、乾燥<sup>かんそう</sup>から身を守る粘液<sup>ねんえき</sup>を出したり、あるいは乾燥に耐えられる層を持つ皮膚<sup>ひふ</sup>に作り替える。

天敵<sup>てんてき</sup>がいるなら、見つからないように外見<sup>がいしん</sup>を変えるか、襲<sup>おそ</sup>われても食<sup>く</sup>われないように毒<sup>どく</sup>や針<sup>は</sup>を身にそなえる。それでも駄目<sup>だめ</sup>なら生息地<sup>せいきち</sup>を変える。できないものは死滅<sup>しじやく</sup>するだけだ。

そういう、原因と結果がある程度推測<sup>すいそく</sup>できるのが生物<sup>せいぶつ</sup>だ。  
大雑把<sup>おおざっぱ</sup>でいいなら単細胞生物<sup>たんさいしゆう</sup>から人間までの系統樹<sup>けいとうじゆ</sup>が描けるのも、その過程<sup>かてい</sup>がなんとなく予想できるからだ。

だが、妖獣には一切の生物の常識は通用しない。いつそ無生物に近い。

例えば昨日まどかが倒した甲羅<sup>いのへ</sup>は、犀<sup>ご</sup>に似た姿かたちをしているが、背骨がない。そして、甲羅<sup>いのへ</sup>のように固い外装といつてもそれは、生物なら身を守るために発達してくるべき本来の甲羅<sup>いのへ</sup>でも皮膚でもない。

なぜなら守られるべき内臓がないのだから。

その体は、岩に似ている。表面が輝石<sup>きせき</sup>で残り全ては玄武岩<sup>げんぶがん</sup>。そういう表現をして間違いない。

そして、そもそもみな形のモノがいるが、一種類一種類、その存在は断絶している。

彼らに共通しているのは、無機的であることと、周囲にある物を片っぱしから壊しまくるという行動原理である。

家があつたら家を壊す。人がいたら人を殺す。歯向う同族<sup>どうぞく</sup>がいたら、どちらかが倒れるまで闘い続ける。

迷惑だが分かりやすい行動だと、まどかは思つたりもある。

どこかの詩人気どりのハンターが、妖獣は神のみた悪夢だと書いていたが、たぶん違うだろう。

妖獸に荒された町や村のありさまは悲惨で手の施しようもないが、そこには残虐性も悪意もない。

あるいはシンプルな破壊だけだ。

もし本当に神が悪夢を見るのなら、そこに描かれるのは人間だと思つ。

頭脳を持ち、まがりなりにもこの大地に君臨してきた悪夢の具現である人間は、その知識と能力をフル稼働して妖獸を退治しようとしてきた。

その間に国民や居住可能な街が半減するという壊滅的被害を受けたものの、國家保全局は、ミサイルや銃、人海戦術で何とかなるタイプの妖獸はすべて絶滅させた。

現在残つてゐるのは、それだけではどうしようもなかつた頑強で凶悪で厄介なモノだけである。

まぢかにとつては雑魚だったとしても、一般人にしたら抵抗不可能な無慈悲な破壊者だ。

そういうモノが未だに無数にいる。

なので、ハンターには妖獸の発する精神を狂わせる咆哮に耐え、そのうえで結界や無数の詠唱で武装し、突入することが求められる。

報奨金はけつ こうな額なので一 獲千金を狙う者もいるが、実際は大勢でパーティを組んで一、二匹フルボックを退治タービスというのが常識だ。

一人頭の分け前は、防衛区域内で地道に働くサラリーマンや職人を多少上回る程度くらい。現場で死ぬこともあるので、残念ながら人気の職業とは言い難い。

とはいって、防衛区域内はそのハンターたちと保全局のパトロールで守られている。

市民の関心も多く寄せられている。

野蛮やばんだろうが粗野そやだろうが、簡単に目立ちたいと思つたらハンターになつて実績をあげまくればいいといつまどかの発想は、実は正しかつた。

\*

## 8 でも式途中で抜けたけどね

「……よつて本校は文武両道の精神を養い、修身を目標に……」

長い長い校長の話が続いていた。

長すぎて、もはや誰も聞いていない。  
目立たないよう<sup>あくび</sup>に欠伸をする生徒と、表情だけは<sup>まじめ</sup>眞面目に生徒を見守っているふりの教師。全員がだるさと嫌気を感じ始めたころ、突如<sup>とつじよ</sup>サイレンが鳴り響いた。

緊急警報。

妖獣が防御区域内に入り込んだ印だ。  
まどかは誰より早く身をひるがえすと、眠気を振り払つて始業式を脱出した。  
雨の校庭を走り抜ける。

「ガンバつて来いよー！」といつトボケタ白鳥の声援に、保全局からのアナウンスが重なる。

『北地区二区画より蟻<sup>アリ</sup>蟻<sup>アリ</sup>ハ匹<sup>ひ</sup>が侵入。北地区二十五から二十八までの住民は保全局員の誘導に従つて避難してください。避難区域付近の方々は、避難準備をお願いします』

まどかは小さく舌打ちした。

避難を指示された地区は、まさにここだ。

貴重品すら持たず、走る住民をよけながら逆走するのは面倒くさい。

人の波をかき分けて家に戻り、剣を持つてまた走る。

おかげで時間を口スした。

白昼堂々妖獣が侵入するなんて滅多にないが、こんな時のために学校に剣を持つていつてもいいだらうか？

却下されること間違いなしの感想と共に、保全局の誘導と逆に進んで超巨大アリ（に見える何か）を探す。蟻嬢は、蟻だとしたら超巨大だが、実は体長は三メートル程度ないと、ビルや家に隠れてしまつ大きさなので、どこにいるか分からなくて困る。

「鬼灯！」

やがて同じ方向に走っていた鬼灯とミラを見つけて叫ぶと、二人はちらりと振り向いて頷いた。

「ちょうど山櫻桃が感知したとこだ。一十六区にまだ一匹残つてゐるそうだから、行くぞ」

補助的詠唱や『力』の感知は得意だが、運動能力低い山櫻桃本人は、まだ追いついていない。それでも蟻嬢一匹なら問題はなさそうだった。

まどかは走り、鬼灯たちを追い抜いた。

逃げてゆく市民はだいぶ少なくなつてゐる。いるのは同業者と保全局員。

ならばもつといいかと、剣を鞘から引き抜く。

走り方を変えた。斜めに腰を落とした構えの姿勢で、すり足で走る。

今の世では誰もやらない、古の隠密の走法。

半身を返して攻撃の当たる面を減らし、前にわずかに泳がせた左手は突然の攻守に対応できるように準備されていく。剣を握った右手さえ、肘をほとんど抜かずに脇の急所を隠していた。

正々堂々が誇りである武士とも、影の戦闘集団である忍びとも違う、独特的の構え。

まじかが体得たいとくしているのはそういうものだ。戦場においてそれは、魂に浸みついた本能に近い。

上から降つて来る酸の液をかいぐぐり、赤銅色の腹に剣を突き出す。

同時に、地面を蹴つて跳ねあがる。一回転する。剣が動きに連動して、蟻嬢の体を一つに裂いた。噴火の際にできる空氣を多く含んだ軽石のような体は、簡単にじとめられる。

遠目に着地すると、狂ったように暴れる蟻嬢に鬼灯がとどめを刺していた。もう一匹もリリヤの魔法で粉々に吹き飛ぶ。

「一上いっじょうがりー」

「……リリヤ」

語尾のはずむ口調で楽しげにポーズをとる女は、周囲の惨状さんじょうを完

全に無視していた。

「元巨大アリだつた破片が近所の家や道路に飛び散つてゐるのは、デモの投石後みたいだ。血でないだけマシだが、軽石の空氣穴部分に溜められていた酸が吹つ飛び、雨に薄められてさえあちこちを溶かしている。」

「俺たちができるだけ被害を抑えようとしてゐるのに、味方のお前が拡大してどうするよお」

「だつてどうせ他の壊された家とか、こここのアスファルトと一緒に政府が直してくれるんでしょう。ちょっとくらい大技使つてもいいじゃない」

「よくないと思いまーす。と」

投げやりに応じた鬼灯は、//ラの腹に腕を回すと、いきなり後ろへと跳んだ。

「さあ……何すんのよー。」

げし、と彼女の肘が鬼灯の肋骨に叩きこまれたが、刹那、その金茶の髪が数本切れて舞い上がった。  
ミラがいた場所を、蟻嬢の牙が通り抜けて行つた。

「なんで？ あたし倒したのに！」

答えはすぐに明らかになつた。一つに裂かれた巨大アリの体から細かな気泡を立てて流れ出ていた酸から、ぽこりと新たな蟻嬢が顔を出したのだ。

ぽこり、ぽこり、ぽこり……

一つ、一つ、三つ……、と赤胴色の頭が、アスファルトさえ溶かす酸の中から新たに産まれ出る。ぴしゃりと液体の音がして、一匹が前脚を地面にかけた。ずるりと体を酸の中から引き出し

一気に飛び出した。

爆発したかのよう、大量の蟻が視界を覆いつくす。

「何コレ ついや つ！ あたし、わけ分かんな  
いの大つ嫌い？」

逆上したミラの魔法がその一帯に炸裂した。

ますます吹き飛ぶ酸。そこから無限に湧き出る蟻嬢。

数十匹に増えたそれらは、無表情の眼で一斉にこちらを見た。

さすがにまどかもゾッとした。

「ほんとに、コレ何だ？ こんなのが聞いたことないぞ」

「蟻嬢では初めてだらうなあ。ただ、他のハンターと飲んだ時に似たような話は聞いた。倒しても倒しても増える、突然変異種みたいのがいるつて」

一力所にかたまつてるのは危険なので、まどかはわざと大きな動作で塀を蹴り、他人の家のベランダに立った。

すべての蟻嬢が首を振つて、視線を向けて来る。その隙に鬼灯も、ミラを抱えて平屋の家の屋根の上に飛び乗つた。濡れた屋根に足を滑らせかけている。

「じゃあそのハンターはどうやってその無限増殖を切り抜けたんだ？ ビック急所でもあつたのか？」

蟻嬢の一匹がベランダに前脚をかけたので、頭部を一刀両断にしてみる。

巨大アリは庭に落ちて動かなくなつたが、階下でものすごい絶叫が聞こえた。

逃げ遅れた人間がいたらしい。確かに自宅にあんなのが転がついたら、嫌だとは思うが。

「つたく。避難勧告つけたらサッサと逃げろつて」

体調が悪かろうと、介護が必要だろうと、逃げなかつたら妖獣に殺されるだけだ。ハンターも保全局員も全力を尽くすが、それは個々の人助けではなく妖獣退治がメイン。自分の命は自分で守るのが、この社会の暗黙のルールだ。

「おい、中のヤツ！ こうなつたら絶対出て来るなよ。そこの死骸が怖くても、今から避難しようなんて考えるな！」

まどかは庭に飛び降りて、自分より大きな蟻嬢の死骸をつかんだ。堀の上から襲つてくるアリもどきの頭を叩き斬りながら、庭を横切る。ひきずる死骸を突き破つてもう一匹が出てきたら、軽傷では済まない。それは分かっていても、人のいる民家の庭に置きっぱなしにはできなかつた。

上から蟻嬢が噛みつきにかかつてくるのを、剣で払う。　こり、と手元で音がする。

彼らは目先の獲物に気を取られて、家の中に入がいるのには気づいていない。　こり。

もう少しで門だ。

さらに一匹の首を落とした。　こり……カリ……カリ。つかんでいる死骸から聞こえる音が、いつしか変わつていた。カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ……

「つ！」

まどかは背負い投げの要領で、蟻嬢の死骸をおもいきり門の外へ放り投げた。

同時に、だらりとした体を食い破り、大量の酸と共に新たな蟻嬢がこちらへと一直線に飛んでくる。

迎え撃つには体勢が不十分。まどかは投げた勢いのまま、前方へ転がった。

受け身から立ち上がり、覆いかぶさつて来た蟻嬢に剣を突き刺し、横をすり抜ける。皮膚抵抗を受けた剣は重かつたが、止まらずに駆け抜ければ、脇腹を碎かれたアリもどきは地響きを立てて倒れた。

それも門の外に放り投げる。

と、聞きなれた声が詠唱を完成させた。

「これでもう増えないから」

道路の真ん中で、ようやく追いついた山桜桃が小さな唇を引き結んだ硬い表情で立っていた。安全な場所など選んでいる余裕はなかったのだろう、妖獣の攻撃を受けたら一撃でおしまいなのに、彼女は無防備な位置にいた。

まどかは反射的に門を飛び越え、彼女と蟻嬢の間にすべりこんだ。

大刀を持つた鬼灯<sup>きとう</sup>が隣に並び、屋根の上からミラが広範囲な魔法を飛ばす。本気になつたミラの手加減ナシはとんでもなく派手だったが、今度は鬼灯も咎めなかつた。

「つせ　　つ？」

鬼灯は掛け声とともに、鬼神の働きをした。大柄な彼の体ほども

ある大刀が、縦横無尽に蟻娘の群れを切り裂いた。一振りで複数の頭部が碎かれ、尾部が飛ぶ。もう一步進んで大刀を一閃させれば、また幾多の蟻もどきが崩れ落ちた。

「……二人とも、ここが防御区域内って忘れてるかもな」

鬼灯にわずかに出遅れたまどかは、一人の攻撃を逃れてきた数匹をさっくり片づけて一息ついた。

うしろでは、山桜桃が別な詠唱を始めていた。

防御の詠い。もちろん無力な彼女自身のためでなく、現場に立つ鬼灯とまどかのためだ。

逆にいえば、彼女はまどかが守ってくれることを信じている。

しかし、詠唱が終わる前にミラが屋根から滑り降りて來た。

「おっしまーい。あーあ、シスコン炸裂しちゃって」

「そう言ひラも魔法がでかすぎでしょ。電線が折れてるんだけど」

酸を浴びてところどころ赤くなつた肌をさらした鬼灯が、巨大アリもどきの死骸を踏み越える。詠唱をやめた山桜桃が兄に駆けよつて、背負つていたバッグから救急セットを出して治療を始めた。

「北部一〇七番隊、静義だ。北地区二十六で蟻娘を退治。数ははじめ一匹。突然変異種だつたから増殖し始めて、最終的には……何匹だらう?」

「しーらない」

ゲリラ戦でも起じたかのよつなどんでもない状況から、ミラは一早く視線を逸らせた。

出来るならまどかだつて、そうしたい。

折り重なる蟻嬢の数なんて数えたくもないし、それ以上に折れた電柱と抉られた地面、切断されたフェンスや塀など見たくない。酸で溶け、黒ずむ家や道路は妖獣の被害だが、それよりひどい損害を与えたのは一人の仲間だ。はつきり言つて、妖獣よりワルモノだ。

『変異種か。厄介なのにあたつたのがお前達で良かつたかもな。そ  
うでなきや、ハンターや住民にまで被害が出るところだつた』  
連絡を受けた保全局員は、ポジティティブシンキングの持ち主ではな  
くて、実情を知らないだけである。

「そう思つてくれるなら、ここは復旧は保全局持ちで頼む。オレ達  
もちよつとやりすぎた気はするから、報奨金ほうちゅうきんは辞退するんで。ヨロ  
シク」

『え?』

何も知らない保全局にすべてを押し付けると、まどかは実戦で培  
つた俊敏さを総動員して通信を切つた。

「やつたな。こんなの直せって言われたら、この歳にして借金持ちはなるところだった」

「やつぱ交渉は静義に任せるに限るわねー」

ミリは山桜桃の前に両手を出した。ノリについていけない少女は、その手のひらにそつと自分のあわせた。ぎこちなく、ミリと同じ方向に首をかしげる。

「ね、ねー……？」

それでいいの、ミリは満足気にこつこつした。

引きこもり山桜桃の社会適合計画はさておき、いつまでも元気にして破壊現場の責任を取られるのは嫌だ。四人は学校方向へ歩き始めた。

「それで、侵入した蟻嬢はぜんぶ始末できたのか？」

「どうだろ。あの現場を見に保全局員が来る前にと思つてすぐ切つたから、聞かなかつた」

「たぶん平氣よ。ハンターだつてそれなりにいるんだから、一人じや無理でも、数人がかりでやれば問題なし。たとえ変異種がいたつて、詠唱担当が数人いれば増えないわけだし」

「ええと……でも、氣流転変を止めるつて氣づかないと、どの詠唱で増えるの抑えられるのか分からないと思つ……」

遠慮がちな主張は、もしかしたら保全局に連絡を入れた方がいい

と促されていいるのかも知れない。

被害が増えるのはたしかに嫌だしな、とまどかが携帯を取り出そうとした時だった。

びくりと山桜桃が震えた。

「「山桜桃?」」

兄とミラがそれぞれ声をかけたが、彼女は聞いていなかった。聞こえていなかつた。

大きく目を見開き、蒼白そうはくな顔を斜め上に向けたまま固まっている。

今まで何度も彼女はそうして異常を感じることがあつたが、これはいつもの比ではなかつた。

小さな唇が震えていた。開きっぱなしの眼はすぐに乾燥して、ぼろぼろと涙をこぼしていた。恐怖とも驚愕ともつかない表情は、不条理な死を強要された殺人事件の被害者のように深く刻まれていた。

彼女の周りにだけ異質な空気がとりまいていた。

どうしたらしいのか分からぬ三人の前で、山桜桃は震える指を、必死に視線の方向に向けた。

「高校、に。いる」

声にならない悲鳴を押し殺し、他の人に理解できる言葉を紡ぐ。ただそれだけの事が、彼女にとつてはとてつもない努力を要した。意識を逸らせたら、狂気に呑み込まれそうなほどの『力』。恐怖。恐怖。恐怖。

「何がいるんだ？」

まどかの問いに返事はなかつた。

山桜桃は指を指しているだけで精一杯だ。

ぱん、と自分の顔を両手で叩いて氣合いを入れた鬼灯が、妹を抱え上げる。彼女は子猫が身をすりよせるように兄の胸に顔をうずめた。

ミラと鬼灯が高校に向けて走り出す。

なんだかよく分からぬまま、まどかも一人を追つた。こういう事態の時は、ずっと山桜桃と共にいる一人の方が慣れているし、間違わない。

\*

氣づかれませんよ！」

江上冬はそう祈りながら走つていた。

最初、避難は形だけのものだつた。防護区域と外との境界は遠く、こんなところまで妖獣が来るとは誰も思つていなかつた。

だから学生でありながらハンターの資格を持つ円城円えんじょううまどかが見事な反射神経で体育館を出て行つた時も、教師の指示に従つて全員で移動する時も、まだ余裕はあつた。

地下道を歩きながら、大通りを越えた向こう側へと渡る生徒たち

に切迫感はどこにもない。

「円城つてホントにハンターなんだ」「

「見た見た。かつこよかつた！」

「えー？ 良かつたけどー、でも今『ころカタナ』とか振り回してんだよ。あたしはナシ。絶対ナシ」

加賀森<sup>かがもり</sup>や周囲の女子が緊張感なく話している時も、笑顔を作れていたと思つ。

「冬は？ やつきかりゅーと黙つてゐけど、ナニ、本氣であいつが怖かつたわけ？」

「怖くはありませんけど、でも、特に仲良くしたいとも思いませんので……」

集団で移動する時の常で、普通に歩くよりも数段ゆっくりとした歩調。話をするのに適した速度は、急がせて事故が起こるよりもいいからだ。

「うわ、何気にさくつと切り捨てたね。円城力ワイン」

「そういうの、気にしないヒトだと思いました。そんな事より、これって帰りが遅くなりますよね。せっかく午後はヒマだと思つたのに、残念です」

「やだー、冬さんヒディ。こんな非常事態に不謹慎<sup>ふきんしん</sup>ー」「

「そうですか？ 湁<sup>みなど</sup>さん、帰りのヒマ時間に通学路にあるお店チ

ックとかしよひと思ひませんでした？」

「……それは、思つてたけど」

やさしさと笑いあえれば、空虚と信頼が冬の胸に交錯した。

ヒディのなんて、自覚していろ。

不謹慎なのも、知つてゐる。

でも、それ以外にどう取り繕えばいいのか分からない。

笑顔という一番分かりやすい仮面をかぶりはじめてから長くて、  
「まかさない自分なんて想像もつかない。

。

そうして皆で移動していたら、後列から悲鳴が聞こえた。

「なに?」「妖獸?」「うそ!」「どうしてここまで?」「知るか

「逃げろ!」

疑問が恐怖に変わるのは一瞬だつた。

逃げる、と誰かが叫んだ時には、もつ生徒たちは列を崩して走り出していた。

冬も、あつという間に人の波に呑み込まれた。  
何度もぶつかられ、体が後ろへと流される。

(どうしましょう)

見回しても、周りに知人は見つけられない。

加賀森も湊も、顔を覚えている同級生すらない。多数の生徒たちが血相を変えて互いに押し合い、押しのけながら走つてゆく。狂乱に近い。

「知らない人ばかり。……だつたら、どうせはぐれちゃつたんだら、少しくらいなら……」

するり、と人の波に逆らつて隙間に潜り込む。

体の小さな冬には、こうして人混みをすり抜けるのはそう難しいことではない。ほんの小さな隙間があれば十分だ。足さえ

ついていれば。

途中、何度か人の腕にひつかつて地面から足が離れて運ばれたので、素早くとはいかななかつたが、冬は踏みつぶされることもなく地下道を戻り、学校にたどりついた。

悲鳴の上がつたと思われる場所に。

自分がヒドイのを自覚してはいても、ヒドイ自分でいたいわけではない。できる範囲であれば、素直に動きたい。

冬はそつと玄関にすべりこんだ。

靴をはき替えに列を離れた生徒が数人、かべきわ壁際に追いやられていた。

(こんな非常時に靴を気にするなんて、さすが人間が違いますねえ。可愛い子もいっぱいですし、時代が違うとこんなに変わるんですね)こんな時だが、つい、にこにこしてしまう。

下駄箱に背を押しつけている女子高生たちは、リボンの色が違うから他の学年だ。冬は学年を特定されないように自分の制服のリボンをしまった。

傘立てにさしてあつた傘を引き抜き、妖獣の侵入で割れかけていたガラスを叩く。

「あいたつ」

派手に割つて注意を引こうとしたのだが、ガラスは思いのほか丈夫だった。人種の変化（背が大きかったり、全般的に垢抜けていたり）もそうだが、技術の進歩もめざましい。

冬は咳払いをして仕切りなおした。

まあいい。ガラスは割れなかつたし、反動で手が痛くなつたが、妖獸も生徒達もこちらを向いた。結果オーライである。

「どうもこんにちはー」

大袈裟おおげさに手を振ると、前脚で一人を踏み倒していた巨大アリは冬へと正対した。

わずかに緩んだ脚に、生徒が逃げようともがいた。しかしそれが却つて妖獸の意識を惹いた。遠くの獲物より近くの獲物、とばかりに牙が生徒の首筋を引き裂ひつつとする。

「ダメですつてば！」

冬は、反射的に手を出していた。

足元に傘が落ち、しゃら、と小さな音がした。伸ばした制服の袖から、銅色の棒が飛び出た。

腕力などなくとも、それは妖獸の体を貫く。断末魔の咆哮ぼうこうがあがるのを、冬は耐えた。

（これくらい、平氣。ぜんぜん平氣）

現にびりびりと小刻みに揺れる棒は、手の震えのせいではなく、咆哮による振動だ。

「早く逃げて下さい！ そうじやなかつたら、その人たちが助けてあげて！」

叫べば、殺されかかっていた学生と、硬直じょうごくしていた女の子たちが我にかかる。精神を引き裂く咆哮の下、蒼白そうはくになりながらも協力して、アリもどきの下から脱出した。

「あなたも」

「『J』つちは大丈夫ですから、早く逃げて下さー！」

自分の事まで心配してくれるなんて、いい人だ。だつたらなおさら早く避難して欲しい。この場は、あらゆる意味で危険だ。

真剣に指示したのが効いたのか、生徒たちは地下道へと走り出した。足取りはまだふらふらしていたが、獣はこの一匹だけ。追いかけてゆくモノはないから、この場から離れてくれさえすれば安心できた。

空を見上げれば、暗く垂れこめた雲。静かに降り続いている雨。何も、変化はなかつた。

（良かつた。見つからなかつた）

ホツと息をついて妖獣を見上げると、ソレはすでに動かなくなつていた。

突き刺していたものを袖の下にしまつ。しゃりん、と涼やかに鳴つた音は、倒れ伏す獣のつくる地響きに紛れて聞こえなかつた。

「これで大丈夫……」

呟いて制服の胸元をつかんだら、

「江上冬？」

遠く離れた校門から、驚いた声がした。びくつと肩がはねる。

「み、見ました？ 私ナニにもしてません幻覚です気のせいです見間違ひです……つて、静義殿？ 戻つて来るの早すぎ

「え」

振り向けば、愕然とした様子の学生がそこにいた。  
年相応の幼さを少しだけ残した整った顔と、縦に伸長しそうで筋肉の追いつかない体。

「いま何って言った？」

少年はものすごい形相かたちで校庭を走つて来る。濁つた水たまりを避けようともしないで、一直線に。大きな手がこっちにむかって伸ばされる。

いつの間に来たのか、分からなかつた。

いや、それよりも。気づけなかつたことよりも、つい彼の名を呼んでしまつたことが失敗だつた。

せつかくここまで知らないふりをしてきたのに。  
彼も気づかないでいてくれたのに。  
だいなしだ。

（ああもう最悪。私のばか）

## 11 みつけたものは、探しものとは違いました。

懐かしい呼び方をしたのは、始業式で会つたばかりの江上冬だつた。

「いま、絶対おまえ 静義殿ねやぎしの つて言つたよな？」

「これだけは聞き間違えない自信があつた。  
まどかは彼女の手を捕まえようとしたが、冬は軽快なフットワー  
クで身をかわした（リスザルか、お前は）。

「……。なにその身軽軽い。

じゃなくて。お前、やつぱりあの冬だろ。  
なんで」

そんな行動をとられる覚えがなくて、まどかは動けなくなつた。  
感動の再会なんて思つてなかつたが、こんなふうに逃げられるな  
んて予想外だ。

固い表情は、今や全身でまどかを警戒している。

「……ウソだろ……」

記憶にある冬とはぜんぜん違つ。大好きだつた笑顔がどこにもな  
い。鷹揚おうようさや優しさ、配慮はどこへ行つた。

「お前、頭でも打つた？」

「……ふつつ、オレ何かしたかくらい言いません？」

「いや、お前がボケかます確率じゅくりの方が高い。肥溜じゆだめに落ちるわ、川に  
流されるわ、地蔵に供えられてた饅頭まんじゅう食つて腹こわすわ」

「記憶にありません。お饅頭まんじゅうにあたつて下痢げりして、いたのは静義殿ねやぎしの  
やないです。どさくさに紛れてヘンなこと言わないで下さー」  
互いに睨みあう。

なんか再会、ぶちこわし。壊したのオレだけだ。

まどかはボリボリと頭をかいた。

冬も、後悔したように視線を足元に落とした。

そんな仕草は変わつていなかつた。

どうしようもない時、彼女はいつもそうしていた。一人で抱えんなよと言つても、そうですねと頷くだけだつた。自分は一度も、彼女の役にたてた事がない。

「悪い。仕切り直そう。

さつき会つたよな。前の印象しかなかつたから、お前だつて氣づかなかつたんだけさ、冬もそう？

だつたら一人してマヌケだな」

まどかが氣を取り直そうとしていたら、

「なになに、あんたがそこの妖獣退治してくれたの？」

「うわ、山桜桃も小さいけど、君も小さくて細いねえ」

「どうぞ」とミラや鬼灯が追いかけてきたので、場は一気に賑やかになつた。

邪魔だ。これでは込み入つて立ち入つた話ができるない。

追い払おうと振り返つたまどかの瞳に、細かく震える山桜桃の姿が映つた。

彼女は、さつきの神がかり的な空氣はもうまどつていなかつた。兄に抱えられたまま怯えながら、惹き付けられるように冬だけを見つめていた。常ならざる雰囲気を感じて、鬼灯もミラも口を閉じ、少女二人を見比べる。

一目で分かる神秘性をそなえた山桜桃は、漆黒の髪と漆黒の瞳。大人しくて滅多に自己主張をしないが、彼女はどこにいても目立

つ。人の世とは交わらない、別種の気配を持つている。

対する冬は、そういう特異性がどこにもなかつた。小さい以外、特徴がない。

ほとんどの学生と見分けのつかない茶色の髪を揺らして、困ったような笑顔をミラに向けた。この場を穩便に収めて欲しいと思つてゐるのが、傍田はたにもうかがえる。

「えーと。まず謝つてみようかな。そこのヒト、ごめんねえ、あたし山桜桃と静義の味方だから。この子たちが迷惑をかけたなら助けてあげるんだけど、今違うでしょ」

冬の笑顔が苦笑に変わつた。

「私こそ、他力本願ですみません」

その方が手つ取り早いもので、と聞こえた気がした。  
始業式の時の加賀森みたいに、勝手に場に応じた解釈してとりなしてくれるので望んでいたのは明白だった。

まじかの頭にカツと血が上つた。

「お前」

だが、まじかが怒りと疑惑をぶつけるよりも、山桜桃が暴き晒しだす方が重かつた。

意識せずに全てを感じる少女は、焦点の合ひにくい瞳を懸命に凝らす。

「……さつき感じたのに。もう分からぬ。隠したの……？ ずっとこの街にいたのに、わたし、分からなかつた。さやぎ、じゃなくて、まじか君みたいには見つけられなかつた。どうして……？」

いつも周囲に埋没している少女は、困ったようだった。山桜桃を見て、まどかを見て、それから一步下がった。

「見つけて欲しくないからです」

まどかは理解した。

冬は、わざと彼を避けていた。  
知つていて、知らないふりをしていた。

もう一度会いたいと思っていたのは自分だけだったかと思うと、腹が立つ。名は、二人だけに通じる符丁だったのに、それすら無意味だった。

「なんでだ？ オレは」

「私は今、預かり物をしているんです。それを返すまでは目立ちたくないんです。静義殿はハンターとして有名ですから、一緒にいると、ちょっと……」

「ちょっとって何だよ！ オレは、もしかしてお前がいたら、この名前に興味を持つて会いに来てくれるかと思ったのに！ だから頑張つてみたのに！」

「……」

彼女は人指し指を額にあてて、考え込んだ。ため息をついた。

なんだか修羅場な雰囲気に、外野三人が口を閉じて彼女の言葉を待つ。まどかも、拳を握りしめて待つてみた。

「あのですねえ、よりこもよつてーのタイミングで私と静義殿が会うつて、おかしくないですか？」

「あ？ 何言つてんだ？」

話が飛んだ。

「預かり物とこの出会いが、ただの偶然じゃないつて申し上げてるんです」

「……誰かが仕組んだって？ なら、誰が、なんで？」

「闇縁殿と櫻水殿の一択でビリだ」

「誰？」

「両方とも知らない名前だ。怪訝に眉を寄せたら、冬が申し訳なさそうに肩を縮めた。怒っていたはずなのに、まじかの方が罪悪感を覚える。

「ふ……」

「別の場所で、時間も経つて、それでも出会いのは奇跡か作為。私はもちろん作為だと思います。私の知る静義殿は、誰かに操られるのを厭う方でした。あなたもそうなら、これ以上むかしの思い出を求めるのは止めてください」

「冬ー」

冬は制止に応じず、ぐるりと身をひるがえした。  
明確な足取りで生徒たちの避難した場所へと歩いてゆく。  
まるで、そちらが自分のいるべき場所だと宣言するかのよつて。

「冬ー」

何度もまどかが叫んでも、戻ってはこなかつた。

食いしばつた歯が、ぎりつと音を立てた。

考えた事もない断絶だつた。まどかは追う事もできずに、冷たい歯の中に立ちつくした。

### 13 へいなんです。暗いです。（前書き）

解析機能つてものによつやく気がつきました。  
読んでくださつていてる方がいると知つて、小躍り。<sup>こおどり。</sup>ばんざい。  
ありがとうございます。

### 13 へんでます。暗いです。

「探してたのは、あの子だったのか？」

濡れたままだとカゼをひく、と放られたタオルを頭からかぶつて、まどかは顔を隠した。本当は一人でいたい気がしたが、実は面倒見のいいミラと鬼灯はそれを許さないだろう。

言い合いをするのもめんどくさく、まどかは連れてこられた鬼灯の家で雨を含んだコートを脱ぎすてた。

「たぶん。見た目も性格もぜんぜん違かつたけど、オレのこと元の呼び方で呼んだし……」

本当は自信がない。

冬はあんなふうに誰かを拒絶する人間ではなかつた。すつとぼけて天然だったが、世が世ならノーベル平和賞でも受賞できんじゃねえつてくらい、すべてに手を差し伸べる性格だった（……いや、やつぱりあいつが受賞するのはコワイ。世が世でなくて良かった）。

「アタリはアタリなんじゃないの。よく分かんなかつたけど、静義とは話通じてたじやない。単に、探し人が静義の望んでいた反応を返さなかつたってだけでしょ」

「まあな……」

ミラは正しい。

拒絶と変容は信じたくないでも、たぶん江上冬が『冬』だ。探していた相手だ。

「これからどうするの？ 人探しのためにハンターになつたなら、見つけちゃつたんだし、パーティ抜ける？」

「ミラ、<sup>とが</sup>咎める声で仲間の名を呼んだ鬼灯は、気づかう視線でまどかを見る。

わだかまりを抱えている時に、早急すぎる質問だった。

しかしミラは、分かつていて尋ねているのだ。そうしないと、まどかが一人で考えすぎてどんどん落ち込んで行くのが予想できたのだろう。

抱えこむ人間は一人で十分だと、猫に似た瞳が語つっていた。

「……やめない」

現在進行形で考えこんでいる山桜桃は、まどかの答えにも笑顔を返すことはなかつた。鬼灯に滴の残る黒髪を拭かれるまま、焦点の合わない表情でただ座つている。

まどかには分からぬが、妖獸を倒した冬が、とにかく怖かつたらしい。

「そう。じゃあ、改めてようしくねー」

見かねたミラはまどかに言うと、山桜桃の腕を取つて浴室へ連れて行つた。髪の長い女性は、ちょっと拭いたくらいではどうにもならない。

途端に静かになつたリビングで居心地の悪さを感じた鬼灯は、コーヒーを淹れ始めた。

「……俺たちの事を考えてやめないのなら、気にするなよ。生きて行く分には三人でも困らない」

「分かってるし、そういうつもりじゃない。今、他に発散できそうなのが思いつかないから」

鬼灯と山桜桃は、妖獸退治の報奨金で一人で暮らしている。

母親は山桜桃を生むとすぐに亡くなり、父親は妻を殺した山桜桃をおそれて逃げたと聞いた。

殺した、とは出産による死亡という意味ではないらしい。腹の中で母親の命を吸いつくして生まれたと、父親はそう狂乱して病院から走り去つたそうだ。

だから一人は途中までは親戚の家で育てられ、鬼灯が高校生の時にハンターになつてからはこつして暮らしている。

山桜桃は産声もあげずに生まれ、成長してもさつきのように焦点の定まらない眼で空中を見ている事が多かつたので、親戚にも気味悪がられ、疎まれていたという。親戚の家は、二人に取つて居心地のいい場所ではなかつたのだろう。

鬼灯は短く笑い声を立てた。

「妖獸退治でストレス解消なんて、お前くらいだらうなあ」

「ミラ、だつてやつてると思つ」

「そうか。そうだな」

大雑把な顔にくつろぎを感じさせる表情を浮かべて、鬼灯はコーヒーを運んで来た。山桜桃が淹れる時はソーサーに乗せられるカツプだが、彼はそのまま持つてくる。当然スプーンもミルクも砂糖も

ない。

あつたら使うが、なくても平氣なのでまどかは素直に礼を言つて受け取つた。

湯氣が立つ。飲む。その間は部屋に沈黙が落ちる。

黙つているのも辛くなつて、まどかはタオルをかぶつたままソファの背もたれに頭を乗せた。少しくすんだ天井が、タオルの間から見える。

「……鬼灯はさ、きつくてつまらない事ばっかりで、その中で一つだけ幸せなことがあつたらどう思つ?」

「その幸せを守りたいかなあ」

落ちついた声で、穏やかに即答された。

彼にとつての幸福は山桜桃サンザンだ。それから「」。

実は重い人生を送るの鬼灯は、今は他にもいろいろと幸せを手に入れている。大学の友人やサークルの話をする時、彼はとても楽しそうだ。

もしそんなふうになれたなら、何かが違つたのだろうか。まどかは思いかけ、記憶にふたをした。ため息が漏れた。

「オレにとつて、『冬』つてそういう存在。一緒にいたのつて一ヶ月くらいだつたけど、野良犬が優しく頭撫でてくれる人間になつく感じ?だから今度も、寄つてつたら撫でてくれると思い込んでた。追い払われるなんて、思わなかつた」

「自分を野良犬に例えるのはどうかと思うが、俺も分かるなあ。昨

田までふつうに友達だったのが、いきなり話しかけるなって

話題が話題なので、二人で沈む。へこむ。

「たぶんあいつは山桜桃のこと聞いたんだ。それでへんな兄妹には関わるなって周りに言われたんだと思う。へこむけどさあ、でもそういうふうに理由はあるんだよな。さっきの子にも理由はあつただろ？」

「預かり物？」

「そう。あと、誰かの作為。こうやって期待させるのがいいのかどうか俺には自信がないんだけど、それを何とかすれば元に戻れるんじゃないのか？」

どうなんだろう、とまどかはわざと冷静に考えてみた。

鬼灯の言葉は希望を持たせてくれるし、気持ちはそうであると信じたがっている。

しかし、手放しで信じるのはまだ怖かった。信じきれない。

冬は、普通ならハンター数人がかりになるはずの蟻嬢ひよじょを一人で倒した。それだけの腕があるのに、人を守るハンターにはなつていない。

自分と初めて会った時なんて、縁もゆかりもない村のために、死にそうになりながら狼を追い払っていたのに。

時が経つたと分かっている。今と昔は違つて当然なのに、下手に優しくされたから、夢見たがつてしまつ。

自分は往生際が悪いのだろうか。諦めた方がいいのだろうか。

人が偽るのも変わるもの当たり前だ。言われたように、思い出なんて追わない方がいいのだろうか。

まどかが自分の思考にどつぶりと嵌まりかけていると、勢いよくドアが開いた。

「やつぱりこうなつてるわけね。どうして鬼灯つたらフォローしないのー？ うつとおしい。この部屋にカビが生えたらあんた達のせい」

シャワーを浴びてきちんと髪を乾かしたミラが、ずかずかと入つて来る。

山桜桃は引つ張つていかれた時と同じく茫洋ぼうようとしていたが、温まつたおかげで蒼白そうはくな肌は桃色に変わっていた。

「フォローはしてくれた。オレが勝手に考え込んでただけで」「高校生に底かばわれる大学生つてどう？」

彼女は、脱ぎっぱなしにしていたコートをハンガーにかけた。かぶつていたタオルでまどかの髪を拭き、てきぱきと世話を焼く。

「どうなんでしょうねえ。とりあえずコーヒー飲むか？」

一人分のカップをテーブルに運んで来た鬼灯は、今度は忘れずに砂糖その他も用意していた。抜かりはない。

ふ、と山桜桃の視点がコーヒーに注がれた。  
音もなくキッキンへ向かうと、ストックしていたクッキーを持つて来る。

## 14 復活は、不死鳥の羽よりクッキーで

とりあえず少女の意識は日常に戻つたらしい。  
鬼灯とミラがそつと安堵の息を吐いた。

「そういえば、静義つて始業式に戻らなくていいのー？」

「学校にも蟻嬢が出たんだぞ。あれを撤去するまで教室になんていけないって。初ホームルームは明日つて賭けてもいい」

力ゴに盛られたクッキーは山桜桃の手作りの残りで、まどかは左手につかめるだけつかんで、ぱりぱりと食べ始めた。

糖分が低下している時にものを考えると、思考まで下降する。落ち込まないための予防だ。

「というのはタテマエで、単純に山桜桃のクッキーが美味しいからでしょ。もう、一人で食べないでよ」

ミラが細い指で、左手にキープしていた菓子の半分をさらつていった。

「横暴」

「どつちが。四人いたら四等分なの。レディファーストって言われないだけマシでしょ」

「ぜつたい却下。ミラに優先権を与えたら、オレまで回らないに決まってる」

「あんたじやないんだから、そんな事するわけないじゃない」

「いいや、する。鬼灯に食わせないために、絶対する」

「あ。鬼灯<sup>きぢゆう</sup>が入つたら、そうかも」

たまに子供になる一人のミニ一クイ争いを横目に、鬼灯が話を戻した。

「……静義が騒いだから忘れかけてたけど、高校を襲つた蟻嬢つてあの子が退治したんだよな。山桜桃はアレに何を感じてたんだ?」

「あの人も『力』のある人。お兄ちゃんや静義みたいに生命力なんか、わたしみたいなのは分からなかつたけど、トータルで強い人。……凄すぎて怖かつたけど、静義だつたら頑張つたら並べるのかな……」

少女は小さくクッキーをかじつて、まどかの視線を避けた。

「はいストップ。山桜桃はそこで落ち込まない。存在力が静義とみあうかどうかなんて関係ないんだから」

……ここはコメントしないほうが安全だ。下手をすると//ラリにぶちつと潰される。

まどかはクッキーに専念する。

「てか強いのはいいけど、あの子どうやつて化け物アリをやつつけたのかしら。見た目華奢きやしゃだつたから、あたしと同じ魔法使い? それとも山桜桃みたいな……のはナシか。詠唱で妖獣は倒せないもんね」

「そういえば見なかつたな」

まどか達が駆けつけた時には、蟻嬢は地面に倒れていた。その後も死骸なんて氣にもとめていなかつたが、致命傷が分かれば採つた手法が分かる。ほんの少しでも、冬の事が分かる。

携帯を取り出したまどかは、保全局の短縮ダイヤルを押した。

三人が注目する中、高校まで突撃したアリモビキの傷を尋ねる。

『南東北高校？ ああ、目撃証言はあつたんで局員が出向いたんだがな、なんにもいなかつたぞ。きっと別の場所に移動したんだろうな』

「は？」

そんなわけはない。死骸はきちんと（とこうのもおかしな表現だが）玄関に倒れていた。話が聞こえている三人も、不審を隠せずにいる。

『けど、そうすると数が合わないんだよな。侵入したのが八匹で、退治の報告があつたのが七匹。お前達、無限増殖タイプだつたんだろ？ 実は数え間違いで、元は三匹だつたりしないか？』

「しない」

それは確實だ。まづかは局員が現場の惨状を思い出す前に、またもや即行で通話を終わらせた。

リビングに沈黙が落ちた。

全員で、顔を見合わせる。

「いったい、どういうことだ？」

当然、誰も答えは知らなかつた。

## 15 インターローグ（前書き）

かーなーり、ホラー氣味です。

たぶん読まなくて話はつながるので、苦手な人は自主避難してください。

## 15 インターローグ

\*

白い小さな獣が、ビルの窓辺から中をのぞいていた。

女性向けの服や雑貨を扱うテナントが複数入っているビルの三階。その上部にある換気用の細窓の枠に前肢をちょこんとかけた姿勢で、長い時間、そよとも髪を動かさず、白田の無いぬめる瞳で中をのぞいていた。

「聞いてる？ 三人目だよ、三人目！ もうヤダ！」

服のかかつたハンガーを次々に右へと移動させながら、少女は携帯電話に向かつて怒鳴っていた。もつとも彼女のメイクは濃かつたので、二十代後半にも見えた。少女と表現するには、多少ひつかかりを覚える外見だ。

「あんたが調子に乗るから。……知らないよ、そんなの。あたしじゃないって！」

その一列にかかつっていた服を全て見るだけ見て、乱暴な足取りで隣の店に移動しようとした彼女は、電話の相手がキレた声で怒鳴り返すのを聞いた。

それから、鋭い、暗い音を。

悲鳴に近いが、人の声ではない。重い、重い音。肉の塊が潰れる音もした。全く関係のない音に、背筋が冷えた。ゾッとする。

「何？ 心愛、あんた何してんの」

『何つて。そっちこそ、いきなり何よ』うがあああああつ

「心愛？」

『だから何なの？』ああああああ

いつも一緒に遊んでいる相手の声が、どこか遠い。その後ろで、彼女の声に重なつて上がる絶叫の方がリアルだ。

激痛をこらえる絶叫に気づいてしまえば、もつその悲鳴を拾う事に集中するしかなかつた。息をひそめて、携帯を耳に押し当てる。

「う、と音がした。

途切れないと断末魔の悲鳴に混ざつた、くもぐつた音は知つている。厚めの肉の下で骨が折れる時の音。いつかどこかのデブを思い切り蹴つた時に同じ音を聞いた。

続く、づひや、という鈍い音は知らない。知らないが、固い物が柔らかい物を突き破つている濁音は、想像がつくだけに嫌なかんじだ。

『ちょっと聞いてんの？ ねえ！』

ちや、ぴちや

』

友人の声がうるさかつた。ただ、かすかに聞こえる液体の音はわかる。痛みにもだえる誰かに、ふざけて灯油をかけてやつた時と一緒。

「心愛、心愛、あんた今何してんの、ホントに大丈夫？」  
『はあ？ 大丈夫つて、ソレあたしのセリフ。あんたおかしくなつてんじやない？』轟音。

耳元での爆音にびくつとして、彼女は携帯を床に取り落とした。ワンバウンドして、ぐるぐる回る長方形をみつめる。

分かつた。

友人の声にかぶつて聞こえる音は、いじめでも悪ふざけでもない。交通事故だ。

最初のは車がガードレールを突き破る音。絶叫は、轢かれた人間の声。骨が折れて、それが肉を突き破った。そしてガソリンが流れて爆発。そういう、一連の音。

でも、どうして、そんなのが聞こえるの？

恐れを宿した目で携帯を睨みつけた彼女は、怖がる自分に腹を立ててもいた。平気なふりで、壊れてしまつた携帯を捨つ。画面が黒い。ひびまで入つていた。

構わない。こんな気持ち悪い物、買いかえてやる。彼女がそう思つた時だつた。

壊れたはずの携帯から、突然さつきの絶叫がもう一度響いた。

「きやあつ」

周りにも聞こえるような大声をあげてしまった。ショッピングモールの客が一斉にこっちを向いた。

その、目。責めるような、目。

「……なによ」

田島涼湖が自殺した件に自分が関わっていたと知った時の、滅多に帰つてこない両親から向けられた目。弟の目。近所の、知り合いの、同級生の、全然知らない他人からの、蔑むような目。

「何みてんのよ！」

イジメなんて、それくらい誰だつてやつてるのに、自分だけじゃ

なのに、自分が悪いと決め付ける人間達の目。

「あたしじゃない、涼湖が悪い！ 大人しくしてればいいのに、巫女だなんてバカ言つて、謝らないから謝らせようとしただけなのに！ あんなに人が来るとは思わなかつた、死ぬなんて思わなかつた？」

注目してくる視線に抗い、少女は怒鳴りながら周囲を睨みつけた。いつもなら睨んだだけで目を逸らすはずの人々は、いつまでもどこまでも彼女を見つめて来た。

「なんで」

目、目、目。責める目が消えない理由は分からなかつた。だが、壊れた携帯から響き続ける絶叫の声が誰なのかは思いついた。彼氏だ。この間事故にあつて、見舞いに行つたばかりの彼。

携帯が着信音を奏でた。  
携帯を持つ手が震えた。

壊れたはずなのに、いつの間にか、メール表示の画面になつていた。

ツギハアナタ

「？」

「つやああああああああああああ  
少女は携帯電話を床に叩きつけた。  
二つに折れた。破片が飛び散る。  
なのに、彼氏の絶叫だけは携帯から聞こえ続ける。やまない。やまない！」

彼女は身をひるがえすと、フロアを駆け抜けた。  
逃げたかった。ただ逃げたかった。  
人を突き飛ばしてエスカレーターを駆け下り、

転んだ。

ヒールのかかとが溝にはまっていた。ありえない。  
体中をエスカレーターの角にぶつけながら転がり落ちる彼女の脳の  
裏に、呪い、という単語が浮かんだ。

エスカレーターのステップに頭を打ち付けて脳挫傷<sup>のうざうじょう</sup>を起こした彼女は、そうして息を引き取つた。

白いものはじつとそれを見ていた。

表情は変わらなかつたが、どこか満足そうな気配<sup>ただよ</sup>が漂つていた。  
ソレはやがて卓球の球ほどもない小さな頭を上へと向けたかと思  
うと、垂直な壁をゆっくりと降りた。

\*

翌日

「へえ、増える妖獣なんているんだ。僕、知らなかつたな」「そういう怖いのはパスだけど、一回見に行つてみたい。まどか、外の見学ツアーを企画しよう！」

「帰宅させなへてもいいなら、こへりでも連れてってみせよ。」「怖えつ！ 置き去りにするなよ。」

昨日同様、三人で登校すると、好奇の視線が集まつた。

「やあー、おはよう諸君。本日もこの由鳥にご注目くださって感謝ですよ。特に女子からの熱い視線とメールは大歓迎」

教壇<sup>きょうだん</sup>にのぼつた白鳥は大げさに手を広げ片足をひき、どこの国・何時代だという一礼を披露<sup>ひろう</sup>した。九割の苦笑と一割の拍手を受けて顔を上げた彼の前を、悠然<sup>ゆうぜん</sup>と三村が通りすぎてゆく。

「キリにメアドを教えてくれる奇特な女子がいるとは思えない」

「いるつて！」

「ああもう、えは、僕に渡して下さって、メモをくれた子はいたね。  
それカウントしちゃダメだよ」

詰まるが、一が三枚それは自慢なのが、自慢なんだから、

素でプチコントを繰り広げる一人へと注目が集まる。

まどかは感謝して、自分の机を探した。  
噂は、もう広がらなくていい。

机の端についている、名前の書かれた付箋を見ながら歩いていると、江上冬が席を立つた。入学当初、席は男女別に五十音順にきめられているので、数人分うしろの加賀森のところへ話をしに行つたらしい。

「……」

それとも避けられたのだろうか。

冬の隣りの机につけられた自分の名前を見つけて、まどかは渋面じゅうめんを作つた。

疑惑は、最初のH.Rで確實になつた。

「一年は長いようであつという間です。みなさんも遊び過ぎて後悔のないよう、気を引き締め直していきましょう。では最後に、何かありますか」

担任の挨拶あいさつとカリキュラムの説明があつた後の事だつた。冬が体を斜めにして手を上げた。

「すみません、先生。私ちいさくて、黒板が見えないんです。一番前にしてもらつてもいいでしょ？」

「ああ、そうだね。相沢さん、替わつても大丈夫ですか？」

ちよこちよこと小走りになつて、すみませんと相沢に謝る冬は、確かに小さい。

身長順に並んだら、文句なく一番前だつ。小さくて、体を斜めにしなければ前の生徒に阻まれて黒板が見えないのも事実だ。

だが、とまどかは思った。

「あいつ、本気で避けてやがる」  
自分の隣りにいたくないというのが本音だろ？。

「円城くん、僕は思うんだけど、一人の女子を一田中田で追うのは、  
それが恋だとしても失礼だ」

放課後、三村が訳知り顔で言った。

「一途さとストーカーは、非常に近しい」

「そういう時は俺たちに任せろって。ほのかさん達を巻き込んで盛  
り上げてやる！」

まどかは中味を全部机の中に入れたままの軽いカバンを、騒ぐ白  
鳥の頭にぶつけてやつた。

「実行したら殺す」

そのままカバンを持って教室を出る。後ろで白鳥が頭を押さえて  
うなつていたが、日常の範囲はんいである。

恋でないのは当然としても、無視されると気分は良くない。

ムカつくしイラつく。

クラスで楽しげに話していた冬は、今日一日、一度もまどかを見  
なかつた。記憶の中の彼女とは違う笑顔を惜しげもなくばらまくく  
せに、ちらりと視線を向けることさえなかつた。

。 いつそ別人だと割り切つたほうが楽だと、何度も思った。のに

差し伸べられた優しい手。唯一、人間扱いをして笑いかけてくれた。その記憶を捨てるのはもつたいない気がした。

もつたないと思う、その貧弱根性が悪かった。  
おかげで本田中には割り切れなかつた。

もつと明日には思考の切り替えもできるだろ。

もういい。もう今田は考えるのはやめよう。まどかがため息をついて下校の鐘が放送される校庭を歩いていると、校門の方でざわめきが起つっていた。

「？」

女子も男子も、小声でわざわざ会つてゐる。みんな好意と好奇心を前面に出しているので、事件ではない。

緊急事態でないならどうでもいいと、まどかがテンションが低いまま校門を過ぎると、背後から声をかけられた。

「や、じやなくて、まどか君」

驚いて振り返ると、山桜桃<sup>やまざくら</sup>が泣きそうな顔で立つていた。

「なんで口にいんだよ」

山櫻桃やまざくらはかなりの引っこみじあんで、親戚しんせきの家にいたころは一度も学校に出てきたこともない不登校、現在は通信教育という筋金入りだ。

まぢかは出会つてから一年たつが、そのあいだ彼女が一人で外出したのを見たことがない。

他人とは異なる雰囲気をもつて、人目を引く顔立ちをしている。どうしても目立つてしまつるのは、本人にとつては針のむしろだらう。

「鬼灯きとうとはは？」

ふるふると、首を横に振られた。美少女以外に許されない仕草じざうである。

「こんな所で待たなくていい。用事があるなら、携帯に電話くれればいいのに」

まぢかが人目ひとめのないとことへ行こうと促すと、少女はまた横に首を振つた。

困つたような表情はあまり自分に向けられたことのないものだつたので、思わずまばたきを繰り返す。

「もしかして、オレじゃない？」

こくりと小さく頷うなづかれて、校舎を振り返る。

生徒数の多い学校だから、ここに数少ない山櫻桃の知り合いがい

てもおかしくはないのだが。

「……冬さん」

震えるか細い声が、一生懸命つむがれた。

「だつたらもう帰つたぞ。他の女子と一緒に、雑貨屋めぐりするつて。割り切ろうとした矢先に、どうして思い出をせんかな」とたんに不機嫌になつて、まどかは告げた。

「うそ……。だつてわたし、ずっとここで待つてたのに」「もしかして、知つて避けたのかもな。オレも避けられっぱなしだつたし」

いざれにしろ、待ち人が残つていないのでしょうがない。まどかは山桜桃と連れだつて帰り道を歩き出した。ずっと人目にさらされて耐えてきた少女は、精神的疲労と空振りの脱力感で足元がふらついている。

「それでよく来る気になれたな」「お兄ちゃんとミラが一緒だと、あのひと、本当を教えてくれないと思つたの」「本当つて?」

感性だけで生きている山桜桃には、人の言葉に違和感を感じるらしい。言葉と感覚の差を埋める一番近い単語を探して考え込んだ少女を根気強く待つて、まどかは街を歩いた。

学生の多い時間帯なので、同じ高校の制服をあちこちで見かける。たまに山桜桃に見とれる男子もいたが、彼らは隣にいるまどかに気がつくと慌てて視線を逸らせた。始業式を飛び出したハンターの

噂は、すでに全校に伝わっている。

「あのひと、隠してるの。それを見せて欲しかったの」「ようやく少女が探し当たる単語は、的確ではなかった。少なくとも露出狂方向ではないはずだ。

分からん。と、まどかは眉を寄せた。

「前にも言ってたな。隠してるから、今まで見つけられなかつたって」

「うん。静義……まどか君が探していた人っていうだけじゃなくて、お話ししたいの。もしかしたら、あのひと、わたしと同じかもしだいから」「

「もう使い分ける意味ないから、呼び方は静義でいい。それで?同じつて、冬が詠唱したのなんて聞いたことないけど

「ちがうの。そうじゃなくて 巫女」

あまりにも真剣な声だった。

ふいに、かつて聞いた狂える女子の言葉が蘇つた。

『それは人ならざる者の声を聞く者』

『神の声を聞き、人に伝える者』

『巫女は、他の人とは同じになれない』

『さあ、神意を聞きなさい』

涼湖は

寂しさと傲慢さをまとった少女だった。

だつたかもしだい。

そうして、彼女はひとり死んだ。

ずいたら、死なないで済んだのか?

自分もそう

放つておか

呪詛を残して。首を吊つて。

助けることができたのだろうか。

もしかしたら、

「……巫女なんて口にするなよ」

「他になんて言つたらいいの？」

山櫻桃には涼湖の悲劇を繰り返して欲しくなくてきつい言い方になつてしまつたが、少女は理解していなかつた。

学校という多くの他人と過ごす場所を避けてきた彼女は、そもそも他人から浮くことが日常なのだ。

「そういうのは、言わなくていい事なんだ」  
まどかは切なさを漏らした。

こんな素直な山櫻桃にさえ、自分には言えないことがある。

冬にしか分かつてもらえないこと。  
いまだに自分は排斥<sup>はいせき</sup>を恐れている。

冬に拒否された今はなおさらだ。大多数はどうでもいいが、一度受け入れてくれた鬼灯たち、白鳥たちを失いたくない。

いっぽ、拒否を恐れない山櫻桃の方が強い。

「じゃあ、そういうモノ。あのときの空気は魔法とも違う気がしたから、ミラの仲間じゃないと思う。似た人がいない人。だから、もしかしたら、搖らぎと濃淡が分かる人なのかなあって」

「……たぶん、分かる」

ハッと、山櫻桃が足を止めて顔を上げた。緋<sup>すが</sup>る色があつた。

「だったら」

「山櫻桃は自分の気持ちをわかつて欲しかつたんだな。同じモノを

見て同じ話をしたかつたんだ。でも、ダメだ。冬は話なんてする前に拒否する」

昔の彼女なら、いくらでも山桜桃の話を聞いただろう。同じ目線に立つだろう。

しかし、冬はまどかが探していた『冬』ではない。変わってしまった。

彼女は空っぽの笑顔で、困ったように笑うだけだ。伸ばされた手など取らない。

「……『冬』が山桜桃だったよかつたのに。そしたら、こんな変な状況になつてなかつたよな。お前を守つてやつたら、オレも普通に幸せなカンジだし、あの時の借りも返せて一石二鳥で」

瞳を伏せたまどかと対照的に、キッと山桜桃がまなじりを上げた。大人しすぎる彼女の、初めての表情だった。

初めてがいっぱいだ、とまどかがズレた事を考えてこらへり、「彼女は大粒の涙をこぼして睨みつけた。

「ゆす……」

「わたしの気持ち、ちょっとは分かつてゐるつて思つたの」。それつて絶対違うと思つて、もつといつ！ 静義のばか？」

ばか？

まどかは走り去る山桜桃を捕まえよつとしかけた体勢で、田を点にした。

今、会話がかみ合つてなかつた。

自分が手ひどく拒絶されたから、山桜桃には傷ついて欲しくなくて、ついでに答えの出ない事を考えすぎて疲れてうつかり逃避ぎみ

なセリフになつた。

山桜桃はそれを、恋愛コードで翻訳ほんやくしていた気がする。違つて。他意なんてなく、単純にへこんでいただけなのに。

まどかが伸ばした手をのろのとに戻して我に返れば、見ていた学生たちが一斉に顔をそむけた。……どう思われたかは、考えたくもない。

「サイマー

吐き捨てる声の元を探せば、雑貨屋の前で加賀森かがもりが軽蔑けいべつの表情を浮かべていた。もちろんその一団には冬も混ざつている。

「うそだろ……」  
いつの間にか四面楚歌まわりじゅうごだつた。

まどかは、完膚かんぶなきまでに撃沈された。

\*

硬直していたまどかは、なんだか可哀想だった。

公衆の面前で「ばか」と泣かれて、女の敵と加賀森に罵かがもりられて。

原因が自分にありそなので、同情の度合いはさらに強まつたが、だからといって何ができるわけでもない。冬は誰にも悟られないよう、そつと溜め息をついた。

水晶の少女はきれいだった。

昨日見た時もきれいだと思ったが、自分の足で立つ姿はもつと際立っていた。漆黒に縁取られた、透明な少女。まるで占いの球だ。あれでは自分の中にすべてを映し過ぎて、痛みも多いだろう。

冬は誰にも見つかりたくないからあの少女の中に自分を映すことはないが、その分だけ彼女の痛みが減るのなら、預かり物さえ悪くない気がした。

「冬といい、今の子といい、円城えんじょうの好みって大人しいタイプなのね」

違うと思つ。

が、『メンントできる立場にないので、困った感じの笑顔をはりつけて首を傾げておく。

「でもひつかかる前に分かつて良かつたよね。」『なると、一組の男子トップは三村かな』

「微妙ですね。あのしゃべり方を何とかしてくれたらアリなんですか？」

「あはは。『円城くん、女性を泣かせるのはクズだと知つてるかな？」

「似てるー。」

『で好き勝手言ひながら駅へと向かつ。』

徒步通学の冬は途中で手を振つて別れ、そして角を曲がつた瞬間に笑みを消した。

疲れた。笑顔が疲れた。

友人たちとの無意味な会話は嫌いではないが、裏事情に勘づきながら笑いのネタにするのはあまりにもきつかった。

心中でまどかに謝つてから、自分の顔に触れる。ちゃんと笑えていただろうか。笑顔の仮面は、剥がれていなかつただろうか。むにむにと頬をつまんで筋肉をほぐしていると、どこからかすすり泣きが聞こえてきた。

「……」

時間と距離から考えて、十中八九さつきの水晶の少女だと思つ。冬がそつと物陰から首だけ出してみると、商業ビルと民家の隙間に残された小さな神社のすみで少女が泣いていた。

保護者、さつさと迎えに来なさい。

そう思つが、まどかも昨日一緒にいた一人も、誰も来ない。十分待つても一十分待つても来ない。

やがて、保護者も変質者も来ないうちに、少女は泣きやんだ。泣きはらした赤い目で、鼻をくすんと鳴らしながら神社を出てゆく。

冬がほつとして彼女の後ろ姿を見送っていると、境内で何かが揺らめいた。振り返れば、桜の結界がざわめいていた。

黒い靄ちやが見えた。

恨みと惡意に満ちていて、それでいて誇らしげなモノ。

慌てて首を戻してもう一度少女を見直してみたが、幸い妙なモノは憑いていなかつた。

「良かつた」

彼女のためにも、自分のためにも。

除靈した方がいいと思うが、実行するのは少しためりう。

昨日は妖獸に手を出して失敗したのだから、やたらに力を使わせないで欲しい。駄目だと分かっていても、実害のあるモノにはどうしても手を出したくなる。それは困る。

あの靄の感じだと理に適つてゐるようだし、それなら我慢しよう。  
我慢我慢。冬はそう自分に言い聞かせた。無意識に、制服の胸元を

ぎゅっと握りしめる。

自分は隠れていてはならない。今はまだ。 そうでなければ、長年  
やき 静義の名を無視してきた苦労が報われない。

その名を聞いたのは、新聞でもニュースでもなかつた。  
同級生の男子が興奮して話題にしていた時だ。

父親が妖獣退治を職業にしている同級生が、自分たちと同い年の  
ハンターが出たと騒いでいた。誰にも師事せず、独特的の剣術を使う  
新人が突然登場した、と。

名前と武器の扱い方からすぐに彼だと分かつた。  
が、同時に、異だと疑つた。

わざわざ自分の知り合いを目につかせる理由が、他に思いつかなかつた。その後で考え直して、厚意じいご のかとも思つたが、はつきりしないうちに接触するのが危険なのに変わりはなかつた。

会つて話したいとは思つたが、結局は危険性を鑑みかんが、記事を読むだけにした。

関係を悟られないために、興味のないフリもした。

元気だと分かれば、それで満足だつた。なのに。

なのに、こんな所で破綻はたんするなんて思わなかつた。  
無試験で国家保全局にキャリア待遇入局といつ噂は嘘だつたのか  
と聞いてみたい。

「私も、闇緑殿のばかと言つてもいいでしょつか？」

彼女の後ろ姿を見送つて、冬が帰ろうとした時だつた。水晶の少女が、何気なく振り向いた。視線が合つた。

「……ばかは、私ですか」

ぱあつと顔を輝かせて走り戻つて来る少女からは逃げられないと知つて、冬は神社から離れて待つた。

\*

## 1.9 お兄ちゅや さんは心配性（前書き）

この漢字だけ・ルビだけの黒画面にポイント下さった方、お気に入り登録をしてくださった方、ありがとうございます。平身低頭。感謝感激です。

携帯には心配しないでとメールが届いたが、夜になつても帰つてこない山櫻桃を心配した鬼灯はリビングをうつうつ歩き回つていた。

泣かせて逃げられたまどかは、右足だけ貧弱ゆすりをしながらソファに座つて仮頂面をしている。

どうしようもない男たちに、ミラはラーメンを突き付けた。

「まだ七時だから。世の中の中学生がその辺うろついててもおかしくない時間つて思い出したら、とにかく食べなさい」

「でも山櫻桃は」

「食・べ・な・さ・い」

過保護な兄を一言で黙らせて、ミラは一人がインスタントラーメンをする向かいで電話をかけた。

メールを打つても返信が来ないので、彼女も心配はしているのだ。何回目かのコールで山櫻桃が出た時には、安心のあまり、逆上して怒鳴りそうだった。

『ミラ？ 連絡が遅くなつてごめんなさい』

「そうね、今度からはメールだけじゃなくてちゃんと電話もちようだい。誘拐されたかもつて悩むお兄サマが神経性胃炎になつちやうから」

ラーメンを黙々とすすつていた一人が、勢いよく顔を上げた。箸はを持つ手が止まっていたが、ミラが睨みつけると、一気に麺をかきこんで丂を流しに運んで洗つてから飛ぶように戻つて来た。

「これだけの動作が一連でできるなら、食器洗いまですればいいの」と思ひ、「アリ」である。

そんな日常性とはかけ離れた心境だったまどかは、彼女の携帯を奪うと叫んだ。

「オレが悪かつた！」

『……そうかも。今わたし、冬さんと一緒になの。一生懸命話したら分かってもらえた。だから、静義が間違い』

理解するまでに数秒かかった。

その間に携帯は鬼灯に取られて、喜びのセリフが凄い大声で響き渡つていたが、まどかの耳と脳はその声を完全にスルーした。

冬が、なに？

「どうじうじうことだ？」

鬼灯の腕に飛びついて携帯に叫べば、弾んだ声がかえってきた。

『巫女<sup>みこ</sup>じやなかつた。それ以上は内緒つて約束したから、秘密<sup>ひみつ</sup>』

「なんだソレ！」

絶叫は鬼灯に振り払われて途切れた。シスコン兄が携帯に頬<sup>頬</sup>ずりしそうな勢いで話しているのを、床に座り込んだまま茫然と眺める。ミラがアワレな雑巾<sup>ぞうきん</sup>でも見るような視線をこちらに向けていたが、まどかは気づけなかつた。

冬と、話した？

秘密？

どうして。どうして自分じゃなくて山桜桃に？

「あんな幸せそうな声、初めて聞いたあ。よかつたあ。山桜桃は友達を作れないからずっと気にしてたんだが、こうして少しずつ話せる人を増やしていけば、いつかは大丈夫だよな！」

感極かんきわまつた声が、まどかの頭上を通りすぎていく。

「まあねー。いきなり明るくてびっくりしたけど、いい傾向なんじやない。どうしても話をしたくて一人で出かけるなんて、ものすごい進歩。冬あきつて子がどういう子か知らないけど、人間凶器な静義と究極に臆病おくびょうな山桜桃を惹きつけるだけでも拍手モノだし」

呆あきれを含んだ、面白おもしろがる声も遠い。

「……オレも行って来る！」

何もかもが理解できなかつた。

冬に会つて話さなければと、気持ちだけが空から回る。もうもくってき眞目的に立ち上がつたところをミラに足を引っ掛けられ、まどかはまた転んだ。

「あたしが静義に勝てるつてあり得ないのに、ほんつと周りが見えてなーい。こんなんで乗りこまれたら、たまつたもんじゃないって。ね、鬼灯。タクシーで帰つて来るつて言つてゐるのに、踏みこんじやダメよねー？」

床に転んだまどかの上に、ミラが馬乗りになる。下から見上げる柔らかな体はある意味男のロマンだが、今はそういう場合ではない。

押さえつけられる前に脱出しようと必死に足掻いたまづかは、

「駄目だな。また山桜桃を泣かせたら、延々正座させてやる」

大真面目なシステム兄に素<sup>すま</sup>巻きにされた。

## 20 インターローグ2（前書き）

またまたホラーです。

前のよりもいやーんな感じです。本人も書いてて嫌でした。

苦手な方は回れ右をお願いします。読まなくても話はつながります。

\*

窓辺から覗く白いモノは、今日はそこについた。

くすんだ壁に貼られたメモやポスター、扉が半開きになつていてるクローゼット。皺だらけのベッドシーツの上には、乱暴に跳ね上げられた毛布と布団が重なり合つていた。

それだけを見たのなら、ありきたりな部屋だと判断しただらう。

だがその部屋の住人は、クローゼットから取り出した制服を思い切り床に叩きつけた。踏みつける。何度も何度も。

数少ない家具が揺れ、少しだけ埃が舞う。

階下に家族がいれば驚いて駆けつけたはずだが、今は誰もいない。

だから少年は、荒れ狂つ心のままに制服を踏みつけた。

次いでハサミを取り出し、渾身の力を込めて突き刺した。鈍い音がして、制服を貫いた刃先がフローリングの床に深く埋もれた。

引き抜くのに苦労した。呼吸が乱れる。

もう一度、頭上高く掲げて振り下ろす。ハサミが正確に校章に突き刺さつた。

引き抜く。振り下ろす。

彼はその作業を繰り返した。息があがり、額にも両手にも冷たい汗が噴き出す。制服は紺色の端切れに成りはて、床は抉られて木片をばら撒いていた。

「くそつ、くそつ、くそつ！」

それでも少年はハサミを振りおろし続けた。口元に泡を吐き、無意味な言葉を繰り返す。

その彼の横にある、いまだに丁寧に整頓されている本棚には、教科書や参考書の他に軽めの小説がたくさん並んでいた。知っている者が見れば、その全ての小説に共通点があると気がつくだろう。

いつも虜<sup>しいた</sup>げられている主人公が何らかの契機<sup>きつき</sup>で立ち上がり、成功し活躍するストーリー。

少年は唯一<sup>おのこ</sup>秩序<sup>じせき</sup>を保っていた本棚に手をかけると、小説を床に放り投げ始めた。小説が無くなると、教科書と参考書も投げ捨てた。あつという間に足の踏み場<sup>ふみ</sup>がなくなる。

棚が空になつた。

「ふううううううううう

ポスターを破り捨てた。メモも捨てた。机の中にあつた全てをかき出して捨てた。机を倒し、空になつた本棚を投げた。棚は壁に当たつて、歪<sup>ゆが</sup>んだ形で曲がつて止まつた。

途中で床の残骸<sup>さんがい</sup>を踏んで、人の中指ほどもある木片<sup>き</sup>が足の裏から甲へと突き破つた。しかし痛覚は激情に圧倒<sup>まちぢ</sup>されて麻痺<sup>まひ</sup>していた。血が本や床を赤く染めたが、彼は作業をやめなかつた。

少年は手当てなど思いもよらず、狂つたように破壊と投棄<sup>とうき</sup>を続けた。

シャツは汗で貼りつき、青い顔には黒い隈くまがあつた。落ちくぼみ、まばたきすら忘れて乾燥した眼球が、憑つかれたように部屋を見回した。

投げる物が無くなつた。壊す物が無くなつた。

「ひひひひひひひ」

少年は唸つた。否定すべき自分の持ち物が無くなれば、あとは自分だ。

白い影が窓辺で揺らぐ。無言で責めるよつて、延々（えんえん）と揺らいでいる。

見たくない見たくない見たくない？

思考とすら言えない原始的な感情で、彼はじみの海を泳いだ。窓の近くにあるニアではなく、部屋の奥おくへ。ビニカ奥おくへ。

一步ごとに、足に刺さった木片が深く食い込む。輪郭りんかくの曖昧な血あいまいの足跡がそこかしこについた。

痛みを感じない代わりに、歩きにくいらたと苛立いらだつた。

少年は必死で逃げた。隠れ場所を探した。

白い影の見えない場所へ。呪いに見つからない場所へ。

半開きのクローゼットがあつた。中は空。その中へ入り込んで、耳をふさぐ。きつく目を閉じる。

それでも そこにいるのが分かる。

きつと責めている。呪いの意識が、隠れたはずの自分を見つけた

のがはつきりと分かる。

ぞつとした。耳をふさいだ手が、ぶるぶると常識を逸した動きをする。震えというより、痙攣だ。

あの時も、彼だけは怖がっていた。今もそつだ。怖い。臆病おくびょうだと自覚している。

「そつだよつ。怖いよ怖かつたよ！ 震えて悪いかよしうがないんだお前もあいつらも消えろ消えろ消えろ消えろ？」

彼は目を閉じ続けた。

彼をいじめる同級生たちは、いつも一緒に来いと強要した。小遣いを巻き上げられ、使い走りをさせられ、他の誰かに軽い暴力をふるう時は参加させられた。

本当は、彼の小遣いが無くなれば他の誰かが払っていたし、飲食だつて共にしていたのだから、同級生たちには彼をいじめているという意識はなかった。格下の仲間という分類に近かった。

しかし本人には、客観的に分析する余裕はどこにもなかつた。彼らと一緒にいるのが辛かつた。常に耐えていた。嫌だとは言えなかつたから、我慢し続けていた。

逆らえれば、今まで自分が暴力行為に参加させられた時の被害者のように、容赦なく殴られ蹴られると思ったから。怖かつたから。

本当は、床に散らばる小説の主人公みたいに、最後には彼らと決別したかった。やりたくない事を強要されたら、断れるようになりたかった。

いつかは、と思っていた。

だがやはり『いつか』はこなかつた。

それより先に、凍えた空気が部屋に満ちた。

恐怖が、満ちた。

そこに、いる。

彼が隠れているクローゼットの真ん前に。

耳をふさいで震え、目をきつづぶり続けているのに、それだけははつきりと感じられた。

熱いのか寒いのか分からぬ感覺。頭の先から足の裏までぬめる汗が噴き出す。足元で、汗と血が混じった。

ようやく木片に気が付いて、彼はそれを抜いた。痛みが全身を貫いた。咳き込むほどに濃い血臭。息が上手くできない。吸えない。干ひあがつた魚が喘ぐのに似て、口だけが何度も開閉する。

悲鳴のような呼吸が漏れ、彼はさらに恐怖を感じた。

見つかつた。見つかつた。見つかつた。どうしよう！

どうもできなかつた。同級生の指示を嫌々受け入れてきたように、予想できる恐怖に竦み続けてきたように、ただ現状に必至でしがみつくしかできない。

彼は本当に、自分が臆病なのは知っていた。

「ごめん悪かつたオレ本当はあいつらを止めたかつたんだけど怖くて止められなかつたごめん許して許して許して俺が悪かつたんじやない謝るから

もう限界だつた。涙と鼻水と泡をたれ流し、彼は喚いた。絶叫した。無意識で謝り続けた。肺の中の全ての息を吐き出して、叫んだ。

彼の謝罪は、逆上と紙一重の逃避だった。相手が呪詛だろうが幽霊だろうが構わない。自分は謝った。悪いと思った。反省した。だから逃がしてくれ。見逃せ。だって、自分も被害者なのだ。

被害者同士、分かつて欲しかった。分かるべきだ。自分だって怖かつた、辛かつた、嫌だつた。誰にも言えないくて、なおさらキッかつた。

今なら、死んでしまつた涼湖になら言える。言つてもいじめは広がらない。分かつてもらえる。だから。

叫び続ける彼の耳に、しゅる、と柔らかな音が届いた。自分の絶叫にかき消されて聞こえるはずのない、かすかな音だつた。

後ろ? と、彼はバツと振りむいた。  
あるいはただのクローゼットの壁。暗くて狭い場所。充血した目を限界まで見開き、その壁を凝視した。

だが、いくら見てもただの壁だつた。涼湖の顔も浮き出なければ、血文字が書かれているわけでもない。どこまでも、ただの壁だつた。  
いて、とにかく一度外に出ようと彼は扉を開けた。

「……」

ふと、そんな場所で膝を抱えて震える自分が滑稽に思えた。  
しかも怪我をした足が熱を帯びた激痛を伝えて来る。涎と涙を拭

身を乗り出した彼の首に、ネクタイが引っかかった。  
それが輪になつているときには、体はもうクローゼット

から下りていた。首が締まつた。しゅる、と頭上のポールでネクタ  
イが柔らかな音を立てた。  
咽喉が鳴った。

どうして。分かつてくれたんじゃなかつたのか？

問いは、もう声にならなかつた。幸か不幸か、頸椎けいついが見事にずれ  
ていた。酸欠よりも早く、生命活動が停止する。  
そして丈夫でないクローゼットのポールが、彼の重みで折れた。  
だらりと垂れた体が、惨劇さんげきの後のような自室にすべり落ちた。白眼しろめ  
には、目の前に散乱した小説は映らなかつた。

白い獣は銀糸のひげをひくひくと動かすと、目を細めた。

少年は臆病で、そして無知だった。

呪詛じゆそは一度発動したら終わるまで止まらないし、人の怒りは、周  
りがそうと知るよりも深いもの。どちらにしろ、逃れられるもので  
はなかつた。

そう、まだ終わらない。

獣は右肢みぎあしを舐めて、毛づくろいをした。そして身軽に窓辺を蹴  
ると、その家から離れて走り去つて行つた。

\*



21 「クラウが立ったー」 あるこども「ウォーター」 (前書き)

ハイジとヘルン・ケラー

## 21 「クララが立った！」あるいは「ウォーター！」

高校生活三日目<sup>みかつ</sup>の朝、担任が出席を取っていた。

低血圧氣味<sup>ほあつあつめい</sup>の間延びした声を聞きながら頬杖<sup>ほほづえ</sup>をついて前を見ていると、どうしても冬が視界に入る。

三村が言うように目で追っているつもりはないのだが、自分と教壇<sup>きょうどう</sup>の間に彼女<sup>かれい</sup>がいるのだからしようがない。拳動不審<sup>けんどうふしん</sup>を承知で、ぎこちない視線<sup>しせん</sup>を向け続けた。

昨日の夜、山櫻桃<sup>やまざくら</sup>は七時半に帰つて來た。

年齢からいって、常識的な時間帯ではあった。山櫻桃には常識が備わつていなかから、冬がそうしたのだ。

メールを打つた後に山櫻桃が返信をしなかったのは、話に夢中になつていて気づかなかつたからで、電話をしなかつたのは鬼灯<sup>きとう</sup>の過保護<sup>くほご</sup>ぶりを冬が知らず、胃に穴が開くまで心配されているとは思いもよらなかつたからだつた。

説明されれば当然すぎて、ミラも含めた三人は脱力した。

今までどこか浮世離れ<sup>うきよばな</sup>していた山櫻桃は、現実の世界に焦点を合わせることができるようになつていた。

帰つて来てから楽しそうに今日の出来事を兄に報告する様子は、平和な一般家庭と大差なかつた。

『なにが普通なのか、どうしたらいいのか誰も言つてくれなかつたけど、冬さんはわたしと同じ言葉で教えてくれたの』

言わなかつたのではなく、言つても通じなかつただけ。まどか達は内心こつそりそう思つたが、自分たちの方も、理解不能な感覚をもつ彼女の言葉が分からぬのだから仕方ない。山桜桃は鬼灯の腕を甘えるようにゆすりながら笑つていた。やるべきことを指示されて居場所を見つけた安心感が、少女に余裕を与えていた。

『感覚のチューイングの仕方を覚えたら、こっち側に集中できるようになつたの。お兄ちゃんつてこいつの顔してたのね』

つて、今まではどう見えてたんだ？

三人で顔を見合させた。

視力の低い人間がはじめてメガネをかけた時のクリア感を想像してみたが、何か違う気がした。『こっち側』があるなら、『あっち側』もあるのだろう。そこはまどか達にはさっぱり分からぬ。

『……山桜桃は同じ奴を探して、そういう技術を尋ねたかったんだたずねた』

？』

『ううん。わたし、そんな事思つてなかつた。みんな混沌じんとんの中で生きてるんだと思ってたんだもの。冬さんに会いに行つたのは、同じ感覚で話ができるかもしれないと思つたから。こんな分かりやすい世界があつて、そこに混ざれる方法があるなんて知らなかつた』

山桜桃は鬼灯の腕を放すと、ミラを真正面から見つめて、ぺたぺたと顔に触れて形を確かめ始めた。

『 ひつじはひつじで、あんたがそんな曖昧な世界見てるとは思わなかつたわよ』

『 そつみたい。どつちも知らないと、自分と違う見え方がある』とに気がつかないんだつて。だからわたしに、チュー一ングすらしようとしないのも珍しくないつて、冬さん言つてた』

ひととおり触れて気が済んだのが、山桜桃はまどかの前に来てテーブルの上にちよこんと正座した。座る場所が違うのは、彼女の気迫に圧されて誰も指摘できなかつた。

『 お説教するから、静義も正座して』

指をさされ毅い視線で促されて、まどかはソファの上に正座する。

『 冬さんは変わっちゃつたからダメって、話してくれないつて、嘘。静義が傷ついてるのは分かつたけど、だからつて貶していいことにはならない』

貶したつもりはなかつたが、冬は冷たい人間だと思い込んでいたのは事実なので黙つて怒られておく。そもそも山桜桃は、反論を受け付ける気はなさそうだ。

『 冬さんはその方がいいから黙つてつて言つたけど、わたしが嫌。わたしは静義が好きだけど、拗ねてる静義は子供だと思う。わたしだって冬さんの本当は見せてもらえなかつたけど、拗ねないもん!』

『 ひつちは年季が違う。ずっと頑張つてたのが裏目に出でたら、想つてた分だけ腹が立つんだ。分かれとは言わないが』

『

つい言い返したら、山桜桃の目がすっと細められた。

現実との接点を見つけたのはいいが、いきなり人形が人間に変わつたようでもどかは戸惑つ。少女がはつきりとした表情を浮かべるたびに落ちつかない気持を味わつ。

『まだ素直に謝らないんだ』

聞いたことのない口調。

『携帯で話した時、一番に謝つただろ』

『わたしにじやなくて、冬さんに。いいもん。明日も会つ約束してるけど、お兄ちゃんとミラは連れて來てもいいって言われたけど、やつぱり静義はお留守番…』

『なに?』

山桜桃が人の世界で暮らしやすくなるのは良いことだと思つ。良く分からぬ感覚と折り合いをつける方法を学べるなら、それに越したことはない。

が、きっかけは自分のはずなのに、どうして一人だけ仲間外れになる?

思いだして、納得いかなくて、まどかは出欠の返事をする冬の後頭部を睨みつけた。

「うなつたら絶対にあとをつけて、山桜桃たちとの集ま

りに混ざつてやる。

三村に注意されたにもかかわらずストーカーな決意をしていると、担任がぱたんと出席簿を閉じた。

「新学期早々こんな話をするのもなんですが、このクラスの山本さんは先日事故に遭つて入院していました」

入学式にも来なかつた理由はそれなのかと、まどかは斜め後ろを振り返つた。

教室中がざわめき、座る者のいない机に視線が集まる。

「そして今朝、病院で息を引き取つたと、じ両親から電話がありました。クラス代表としてお葬式への出席と香典を」

事務的な担任の冷静さは、生徒たちの驚きにあつていつ間に覆いつくされた。

## 21 「クララが立った!」あることは「ウォーター」（後書き）

今まで投稿時間が一定でなくてすみません。  
これからは毎日午後5時に更新します。

## 22 ストーカー？

放課後、部活見学の誘いを断つた冬が教室を出た。

まどかも追おうとカバンをつかんだが、その目の前に加賀森と白鳥が立ちふさがった。見失わないようにはイントをかけて抜こうとしたら、さらに湊と三村が邪魔をした。

「何

ハンターの気迫で睨めばかりの確率で逃げていくはずなのに、慣れている三村はおろか、加賀森も微動だにしないで見上げて来た。

「昨日女の子を泣かせておいて、まだ冬に声をかけようなんていい度胸よね」

「みーたーぞー。あのキレイな子は誰だ。迎えに来てくれる彼女がいるなんて、一言も聞いてないぞ」

ズルイズルイと悶えている白鳥と、完全に誤解している加賀森はさて置いて。まどかは比較的はなしの通じる後ろの一人に理解を求めた。

「あれは彼女じゃなくて、組んでいる仲間」

「ばれやすい嘘は、つかない方が何倍も得なんだけね。あんな小さな子がハンターなら、最年少記録はあの子だらう。だけどそんな話は聞かない

メガネのブリッジを押し上げつつ皿のインテリ学生は、どこまでも理路整然だ。

「山櫻桃は仲間だけど、ハンターの資格は持っていない。一人では出歩けない不登校児で、危なつかしいからって保全局から許可が出てないんだ。代わりに、兄の鬼灯に同伴許可証が出てる」

冬はもう見えない。

だが山櫻桃たちと会つと分かっている以上、探す方法はいくらでもある。まどかはドアから三村へと視線を戻した。

「その山櫻桃に、冬が現実への適応方法を教てるんだ。だから一回ちゃんと話をしたいのに、あいつ、一方的に避けるんだ」

話したい理由は違うが、嘘は言つていない。

嘘でない以上、三村の勘と理論は突破できるはずだ。

思つた通り、ふうんと片眉を上げた三村と、ついでに加賀森の雰囲気が和らいだ。

「冬つてそういう得意だから、引きこもりを何とかしてるのは分かるなあ。円城<sup>えんじょう</sup>つて、ボランティア関係の知り合いだつたんだ？」

「いや。違うだろ、恋だろ、一股だろ！」

「誰が一股だ！ まだ彼女の一人もいないのに、勝手に話を作るな！」

思わず本気で鞄を投げつけたくなつたが、ガマンする。こつちが冗談でも、白鳥に当たつたら大けが確實だ。

「……彼女、いないんだ。江上さんもフリーだけど？」「最大限の友情を希望するっ！」

超高速で耳まで真つ赤に染まつて断言したまどかの勢いに圧され

て、湊がぽかんと口を開けた。

万言を尽くすより、今の一回で実感できた。

「分かつたけど……。もしかして円城、恋愛つてしたことない？オトモダチから始めましょう？」

あまりの主張の激しさに、加賀森がひき気味に尋ねる。

「うるさい。何だつていいだろ。もう行く」

子供のように不機嫌に、四人をかき分ける。

荒い足取りで廊下に出ると、予想した通り冬の姿は見えなくなっていた。ふん、とまどかは携帯を取り出す。これくらいでまたと思つたら大間違いだ。

「北部一〇七番隊、さやぎ静義。プチッと緊急事態。忙しいとこ悪いんだけど、山桜桃たちの居場所教えてくれない？」

「円城くん……。君ね、公共機関の私物化はダメだよ」

こんなことで国家保全局のGPS機能を躊躇なく利用したまどかに、同級生の呆れあきを含んだため息が向けられた。

## 22 ストーカー？（後書き）

短いですが、切りがよかつたので。  
かわりに、次は長めになります。

\*

「改めまして、江上冬と申します。ご挨拶が遅れて申し訳ありませんでした」

「場末の雰囲気がただよう店で、冬は丁寧に頭を下げる。横には、満面の笑顔の山桜桃がいる。

「吉川貴朝です。登録名の鬼灯で呼んでいただければと思います。このたびは妹がお世話になりました。おかげで昨夜からずっと、あれは何これは何と、今まで興味を持たなかつた物にも関心を示すようになります。感謝しています」

鬼灯も深々と頭を下げる。

高校一年生女子と大学三年生男子（彼は再々試験に受かった）の正式な挨拶は、あんたらどこの保護者会よソレと、ミラガ内心つっこむくらいだつた。

丁寧語が地の冬はともかく、つられた鬼灯の四面四角な態度は似合わなすぎだ。

「あたし//ア。ねえねえ、さつそく質問いい？ 冬は山桜桃の感覚も分かるヒトなんでしょう。何者？ あと、静義との関係とー、拒否した理由も教えて？」

ハイテンションで早口で問われて、冬はいつもの困った笑顔の仮

面をはりつけた。

ハンターが集う店で頼むには邪道だったココアを両手で持つて、  
湯氣<sup>ゆげ</sup>を吹ぐ。

隣の少女が同じ動作でまねをするのは、彼女が自分に、慣れない世界の案内役を割り振っているからだろう。

ココアは甘くておいしかったが、少女の信頼は苦い。

「答えにくい質問ばかりです。山桜桃さんにアドバイスした人間がどんな者か、ご家族が不安に思われないようにお会いしてみたのですが。答えられない事の方が多いと、却つて安心できないかもしませんね」

「ええと、できれば信頼させて欲しいなあと思います」

最初から手の内は明かさないと釘を刺されて、鬼灯は苦笑し、ミラは鼻白んだ。

「善処<sup>ぜんじょ</sup>します。まず私が何者かという質問ですが、静義殿からはどう窺つているのでしょうか」

「野良犬を構つてくれた人間」

冬は、ぐらりと椅子ごとひっくり返るかと思った。予想外すぎてコメントのしようがない。どんな認識なのだろう?

「他は特には聞いてない」

つまり何も教えていないわけだ。

冬は額に指を当てつつ、気合いで立ち直つてみた。

「そうですか。本人が言いたくないことを私が言うのもどうかと思いますので、細かいところは省きましょう」

「ミラ、端折るなー。知る権利はござったー」「デモかストライキの参加者のように右拳を上げたミラの口を大きな手でふさぎ、鬼灯が領く。

「私はいろんなモノが見えるんです。山桜桃さんも見えるみたいだつたので、見えた物の処理の仕方のコツを教えてみました」

と、冬は自分の頭を指さしてみた。

視界は今までと変わらないが、脳で視覚情報を処理する過程で少し意識をすれば、他の人間と同じものだけを取り出すことができる。

「あとは慣れていけばいいので、疲れない程度に街に出たり他の人と話をしたらいでですよ。ええと、次は」

静義殿との関係ですね、と思つたら、鬼灯がパタパタと横に手を振つた。ミラが「違うだろーっ」と両手をテーブルについて立ち上がり怒鳴り、椅子が倒れる。

「……あの椅子、直してもらつてもいいですか?」

きょとんとしている山桜桃に笑顔で頬むと、少女は元気よく飛んでいって椅子を立てて戻つて来た。  
いい子ですね、と頭をなでると含羞んでうつむく。

「そこ! ほのぼの空間作つてんじゃないわよ。あたしは山桜桃に何を教えたか訊いたんじやなくて、あんたが何者かつて言つてんの!」

「そういえば、そうだった。

「つっかりしました、と冬がへにやつと笑うと、//リはギリギリと歯ぎしりをしながら席についた。

「悪いんだけど、その天然どうにかしてくれない。あたし、ズレるのとボケるのとわけ分かんないのが嫌いなの」

「//リ短氣だから」

「気にしないでと山桜桃がにっこりしたので、彼女はますます歯ぎしりをして腕を組んだ。人間はげつ歯類じやないんだから歯がすり減りますよと思つたが、言つたら更にひどくなりそつたので止やめておく。

「でも、何者と問われても困ります。色々見えて、多少おせつかいなので、色々面倒事に巻き込まれるだけなんんですけど。妖獸退治はなりゆきで」

「ど・う・やつ・て！」

バンバンとテーブルを叩きながら//リが訊く。ココアがこぼれないように、カップは手に持つたまいまるしかない。また真似をしている山桜桃を横目で見て、飲み物は常に持つという間違った認識ができるないと良いなあ、と思つたり。

「一昨日は手近にある棒で突きました」

「固いでしょ妖獸！ あんたみたいな細腕で突いたくらいでじつにかなるか？」

「なりますよ。 あ」

カラソと鳴つた入口のベルに振りかえると、全力疾走して来たま

どかが息を切らして入つて來た。

「時間切れですね。では私は、」これで失礼させていただきます。静義殿によろしくお伝えください」

「逃げんな！」

飲みかけのカップを置いて冬が伝票を持つてレジに向かうと、怒りのこもった目つきでまどかがつかみかかつて來た。身をかわして、ひょいと避ける。制服のスカートが翻る。彼が冷静ならできない芸当だが、逆上している今なら簡単だった。

「ところで、私は静義殿のこと友人だと思つてました。わんこじやありません」

ぴた、と彼が動きを止めた。  
瞳が迷うように揺れた。

「……だったら、もし本当にそつなら頼みがある。この近くの神社で同級生が自殺した。嘘か本当かは知らないが、そいつの呪詛で二人死んだつて聞いてる。もし涼湖りょうこが呪いをかけたなら、そんなのは残つて欲しくない。解除してくれ」

「いいですよ」

神社の呪詛は、昨日見た。

山桜桃が泣いていた境内に、濃すぎる怨念を残していた。

田立つのは困るが、あれくらいならきり見つからない範囲で成仏させられると思う。冬自身も気になつていたので、このタイミングは『やつちやえ』という世界からの『ゴーサインだ。そ

う、ムリヤリ解釈してみる。

あつさり頷いたら驚かれた。息をのむ音。  
「今でも、できるんだ……」

まど  
惑う声。信じたいけれど、一度拒否されたために信じきれない感情が手に取るように分かつた。

そんな顔をしないで欲しかった。大丈夫と請け合いたかった。今も本当は、友人でいたかった。今う  
でも、だめだ。

冬は制服の胸元をキュッとつかんで、いつもの笑顔の仮面をかぶつた。

「そのかわり、もう話しかけないで下さいね」  
絶望が相手を染めるのを見たくないで、冬は踵を返すと、素早く会計を済ませて立ち去った。

\*

## 24 転（前書き）

起承転結の、転です。

「江上冬つ！ あの子も静義せいやきも、どうしてこいつなのよ？ ハッキリしないとスッキリしないって言つてんのに？」

バンバンバンとテーブルを叩く音が店に響き渡つたが、荒事が日常的なハンターはそれくらいは気にしない。密はみんな自分の話を続けている。

「おじさーん、レミ・マルタンをストレートで！」

途中からキレイていたミラは、コーヒーのおかわりではなくブランデーを注文した。

「静義と一緒にいるのがダメだからって、話の途中で切り上げる」とないじゃない！

「あと、大きな魔法や詠唱の近くにもいるのもダメなんだって。だからわたし達ともあんまり会わないって、昨日言われた。今日は特別におまけだったの。なのに、終わっちゃった」

残念そうに肩を落とした山櫻桃やまざくらを、兄がなだめている。

まどかは「一ラを飲みながら入口を見つめた。

自分といいのも、目立つのも、大きな魔法も詠唱もダメ。でもそれ以外なら、山櫻桃にもレクチャーするし、妖獣も退治するし、呪詛じゅそも解とく。その差はたぶん、使う力が大きいか小さいかだ。

「預かり物つて何か聞けたか？」

「全然。あの子、『」まかす』気は無かつたのかもしれないけど凄く天  
然で、横道にそれるわミラは怒るわで、そこまで話が進まなかつた  
んだ」

「そつか……」

友人だと思つていた、と冬は言つた。彼女は笑顔の仮面をかぶり  
拒絶の言葉をつむぐが、あの時は素すだつた。空虚ではなかつた。  
まどかは「コーラを一気飲みすると、席を立つてコートを羽織つた。

「来たばっかでもう帰るの？」

「預かり物がなんだか、訊いて来る」

使う力が小さい時の選択は、昔と重なる。  
もしそれが本心なら、友人だと思つてくれていたなら。

『面倒くさい預かり物』をどうにかしたら、ほんとうに冬は前みた  
いになつてくれるだろうか？ あの笑顔を向けてくれるだろうか？

店の外に走り出ると、山桜桃が追いかけてきた。もつとも、少女  
は足が遅いので、すぐに飛びだして来た鬼灯に追い抜かれた。

「急がなきやならないのか？」

「呪詛を祓つたら、話しかけるなつて言われた。だつたら祓つ前に、  
自分で訊いてみたい」

まどかは涼湖が自殺した神社へと急いだ。  
消えない彼女の嘆きは、まだ胸に刺さつている。

『人ならざる者の声を聞く者』  
うだつた。聞こえている。

冬もそ

『巫女は、他の人とは同じになれない』

それでも『冬

は誰より他人と共にいた。

山桜桃でさえ人の世が見えた。ならばそこまで酷くなかった涼湖なら、もっと救われたはずだ。だから

他人と同じではなくても、共にいられると言えばよかつた。どうして涼湖の事が忘れられないのか、気になってしまふかは分かつてている。

後悔だ。

まじかはどうしたらいのか知つていたのに、彼女が自ら死を選ぶまで何もしなかった。その慙愧ざんきの念がどうしても消えない。

優しくないと決めつけた冬は、山桜桃の話を聞いて導いたのに。自分は昔から変わらない。

善人になりたかったわけじゃない。ほんの少しだけ、誰かのためになりたかっただけだ。なのに、それすらできない。保身が先に立つ。

本当は。

『冬』みたいになりたかった。

絶望の人生の最後に思いだして、辛くとも悪くなかったなと苦笑をもたらせる人間に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4045y/>

---

問い合わせ「探しものは何ですか」 答え「転生前の友人です」

2011年11月29日17時46分発行